幕末から維新期における社会変動と大衆の無意識 ―招き猫と化け猫騒動―

遠　藤　　薫

1．はじめに

現代，ペット・ブームとも相まって，とくに猫の人気が高まっている．

（一般社団法人）ペットフード協会の推計によれば，2017年，猫の飼育数は，調査開始以来はじめて犬の飼育数を上回った（図１[1)]）．

自宅で飼うだけでなく，猫カフェ[2)]で猫と戯れる楽しみ方もある．また，

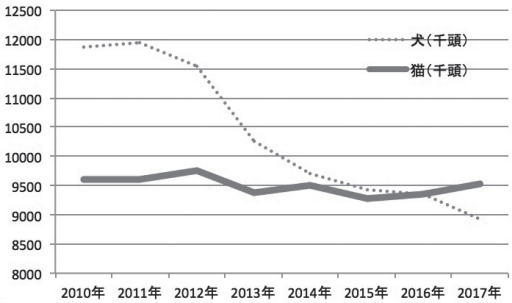


図1　猫の飼育数（推計）の推移

1）データ出所：2013年～ 2017年については，（一社）ペットフード協会『平成29年　全国犬猫飼育実態調査』，2010 ～ 2012年については（一社）ペットフード協会『平成25年　全国犬猫飼育実態調査』

2)『日経トレンディネット　2008年5月2日』(http://trendy.nikkeibp.co.jp/article/column/20080422/1009762/）によれば，「猫カフェの始まりは1998年台湾にオープンした「猫花園」．猫と同じ空間でお茶を飲めるというスタイルが台湾国内で話題になり，このお店には日本からの観光客も訪れるようになった．日本ではまず大阪に2004年「猫の時間」が開店，2005年には町田の「ねこのみせ」が関東の第一号としてオープンした」．

地域猫[3] との共生の試みや，「猫島」など猫による観光地化[4] の例も多い．

犬と猫を比べると，犬は散歩など世話が大変であるのに比べて，猫は自律的に生活し，身体も小さいので世話が楽である．また，飼育犬は血統書付きのブランド種が多いのに対して，飼育猫のほとんどが雑種である[5] のも特徴といえよう．

実体としての猫を愛好するだけでなく，ドラえもんやハローキティ，赤猫などさまざまなキャラクターも親しまれている．各地のゆるキャラにも猫をモチーフとしたものが多い[6]．猫のキャラクター化の先駆ともいえる「招き猫」は江戸後期に生まれたが，様々なバリエーションを生みだしながら，200年近くたった現在も．それらは多様な猫グッズとして街にあふれている．

なぜいま，「猫」は人気を呼ぶのか？

この理由に関して，すでに遠藤（2017）は，江戸期以降，猫が一般民衆の生活のなかに浸透し，近世から近代への移行の社会的基盤の準備に深く関わっていたことを論じた．

本稿ではさらに，江戸期の猫受容が，「招き猫」ブームと「化け猫」ブームの両面を併せ持っていたことに着目し，その二面性を幕末から維新期における社会変動と大衆の無意識という面から，論じることとする．そこから，現代にも引き継がれている「猫」受容の社会的意味とその変容を明らかにすることが本稿の目的である．

3）環境庁『住宅密集地における犬猫の適正飼養ガイドライン』（平成22年2月）によれば，「地域の理解と協力を得て，地域住民の認知と合意が得られている，特定の飼い主のいない猫．その地域にあった方法で，飼育管理者を明確にし，飼育する対象の猫を把握するとともに，フードやふん尿の管理，不妊去勢手術の徹底，周辺美化など地域のルールに基づいて適切に飼育管理し，これ以上数を増やさず，一代限りの生を全うさせる猫を指」す．

4）遠藤（2018）など参照

5）（一社）ペットフード協会『平成29年　全国犬猫飼育実態調査』による．

6）ひこにゃん（彦根市），しまねっこ（島根県），りそにゃ（りそな銀行）など

2．平安期における猫

2.1　宮廷文学の猫

「猫」は謎にみちた存在である．

遠藤（2017）でも論じたように，猫は奈良期に中国から輸入されたとされる[7]．その目的は，経典や宝物，穀物へのネズミの害を防ぐという意味だけでなく，富貴の象徴であったり，禅語の表象であったり，何よりも愛玩の対象であったりした．

古い時代の猫の表象は必ずしも多くはないが，例えばおよそ900年前に藤原摂関家により春日大社に奉納されたとされる金地螺鈿抜形太刀には，竹林で雀を狙い，捉え，取り逃がす猫の活き活きした姿態が表現されている．「竹，雀，猫」という画題は中国から伝えられた画題と考えられるが，それを超えた猫への愛に満ちた眼差しが感じられる作品である．

清少納言の『枕草子』には猫に関する記事がいくつも含まれている．なかでも，第9段の一条天皇の猫への溺愛ぶりはよく知られている．また第85段[8]「なまめかしきもの」として挙げられた「白き組の細き．帽額（もこう）のあざやかなる．簾の外，高欄に，いとをかしげなる猫の，赤き首綱（くびつな）に白き札つきて，碇の緒，組の長きなどつけて引きありくも，をかしうなまめきたり」[9] という部分は，美しい猫の魅力をよく描写している．

2.2　女三の宮の恋と猫

清少納言が「なまめかしきもの」と表現したような猫が，『源氏物語』の「若菜下」では，まさに物語の展開に重要な役割を果たす．

猫は，まだよく人にもなつかぬにや，綱いと長く付きたりけるを，物にひ

7）中国から来た猫は「唐猫」とも呼ばれた．日本原産の猫についてはあまり資料がない．
8）89段のバージョンもある．
9）現代語訳：白く細い組紐．鮮やかな色の帽額．その御簾の外の高欄に，白い名札の付いた赤い首綱の可愛い猫が，重りの紐や長い組紐を引き歩く様子はとても優美だ．

きかけまつはれにけるを，逃げむとひこしろふほどに，御簾の側いとあらはに引き開けられたるを，とみにひき直す人もなし．（若菜（上）第7段）（女三の宮の猫は，まだ人に慣れていないので長い首綱をつけていた．その首綱が引っかかって，女三の宮の居室を庭にいる人びとの目から隠していた御簾が引き上げられてしまった）．

このとき，光源氏の正妻である女三の宮にかねてからあこがれていた柏木は三の宮の姿を垣間見てしまい，深い恋に落ちる．柏木はこの猫を預かり，大事に育てつつ，三の宮への想いをさらに深めていく．やがて，柏木は禁じられた思いを遂げるが，三の宮が不義の子を身籠もったことを知り，罪の意識にさいなまれ，若くして死んでいくのである．

この悲恋のエピソードは，二人を隔てる御簾を駆け抜ける猫の姿と重なって，後代の人々に強い印象を残した．（あたかもギリシア神話のエロスのように，理性をこえた激しいパッションをもたらす，甘美で不穏な「猫」のイメージがここにはくっきりと表れている）．

3．江戸期における「猫」の流行

3.1　生類憐れみの令ー都市における人間と動物の共生

上代から中世まで，「猫」は貴顕や知識人とともにしか記録に残る事は少なかった．

しかし，江戸期に入るころから，猫は日常的に一般の人々と社会空間を共にする存在へと変化した．（藤原（2014），遠藤（2017）など参照）．

特に都市部においては，動物の脱野生化が進行した．

犬や鳥，金魚など，様々な動物が愛玩用に飼育された．（むろん，使役用や食用の飼育もあった）．

その一方，動物に対する残酷な扱い（肉食，殺戮，見世物芸の仕込みなど）も多く行われていた．これに対して，五代将軍綱吉は，「生類憐れみの

令」によって動物愛護の政策を打ち出した．『武江年表』の貞享二年乙丑（一六八五）の記事にも，「〔金補〕七月十四日，将軍通行の路上に，犬猫の放し飼ひを許可，何方通行の際も，犬猫を繋ぎ置くことなからしむ（将軍が通る路上でも，犬や猫の放し飼いを許可する．誰が通るときも，犬や猫をつながなくてもよい）」とある．

厳密に言えば，「生類憐れみの令」については夥しい議論があるが，根岸光男は，「「生類憐み」観念は，仏教の殺生禁断や神道・儒教の積れの系譜を引きつつ，この期の社会のありように規定されて創出され，その政策は綱吉政権が目ざした「仁政」実現のための社会悪是正策の象徴としての意味をもつものとなった」（根岸2006：79）としている．

3.2　ファッションとしての「猫」

そんな中，猫は庶民のファッションや文化の中にも多く登場するようになる．

そこでしばしば参照されたのが，先に述べた源氏物語である．『源氏物語』は長い時をこえて愛読されてきたが，江戸期には江戸の時代に合わせた様式で，描かれるようになる．とくに女三の宮のエピソードは好まれたようである（例えば，図１，２）．

その甘美でどこか危険なイメージは，猫を連れた美女の図としても多く描かれるようになる（図３）．

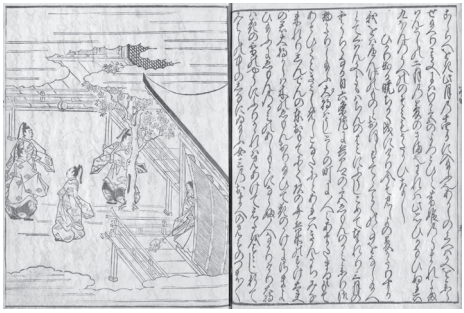


図１　「若菜下」（野々口立圃，寛文12,『おさな源氏 4巻』　国立国会図書館蔵）

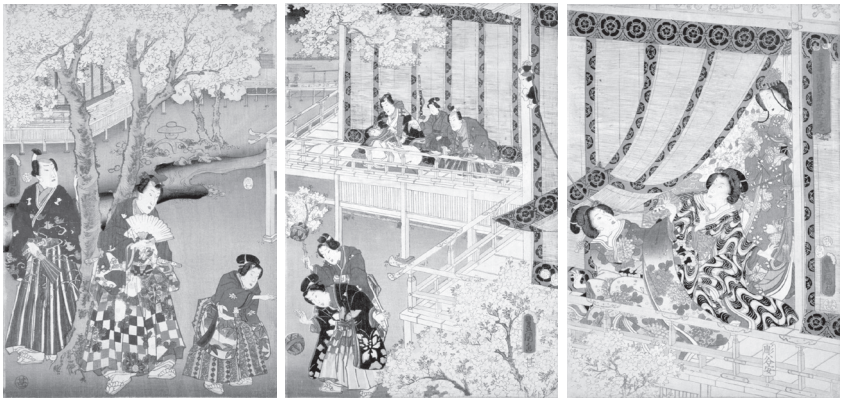


図２「吾妻源氏若菜之巻」（豊国画，丸屋甚八･出版，安政１『時世源氏十二ヶ月外源氏』）（国立国会図書館蔵）

また藤井享子は，女三の宮の物語をイメージさせる図柄が，当時，小袖の文様としても愛好されていたことを指摘している（図４，５）.

図３　鳥居清倍
「末広お国歌舞伎出来島大助」
（東京国立博物館）

図４　鳥居清信
「西川岡之助」（元禄13（1700））
（国立国会図書館蔵）

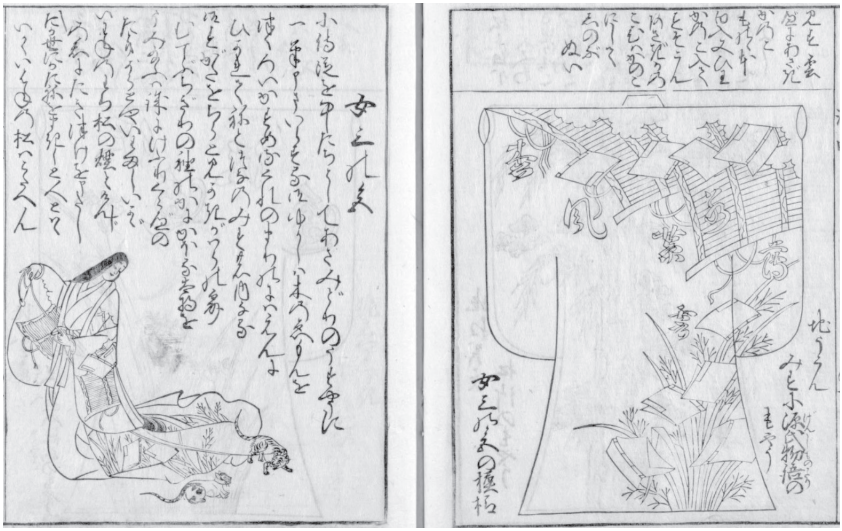


図５　加藤吉定[他]　貞享4（1681）刊『源氏ひなかた』3巻　敦賀屋三右衛門（国立国会図書館蔵）

この頃，水木辰之助（1673-1745）という歌舞伎役者が大人気であった．彼は，大阪の立役の名優大和屋甚兵衛の甥として生まれた．山東京伝の『近世奇跡考』（1804）によれば，「元禄4年京四條より始て江戸に下り，市村竹之丞座顔見世に，四季御所桜と云四番つづきの狂言を興業す，これを辰之助が土産狂言と云，辰之助はる姫の役，第二番に槍おどりの所作，第三番目にから猫の所作をせしに，江戸中こぞりて賞美し，此狂言を見ざるを恥とせしよし，猫の所作の意趣ははる姫の役にて，戀ひ慕ふ男わが實の兄なること知れて夫婦となりがたきを悲む折節，兄弟の猫の戀するを見て羨み，遂に我身猫となりて胡蝶に狂ふ狂言也」という（図６）．これは，元禄元年に都萬太座で興行した「今源氏六十帖」を改題したものとされる（藤井1921，p.305）が，元の源氏物語とは大きく異なるものの，身を引き裂かれるような切ない恋のイメージを受け継いでいるといえるかもしれない．

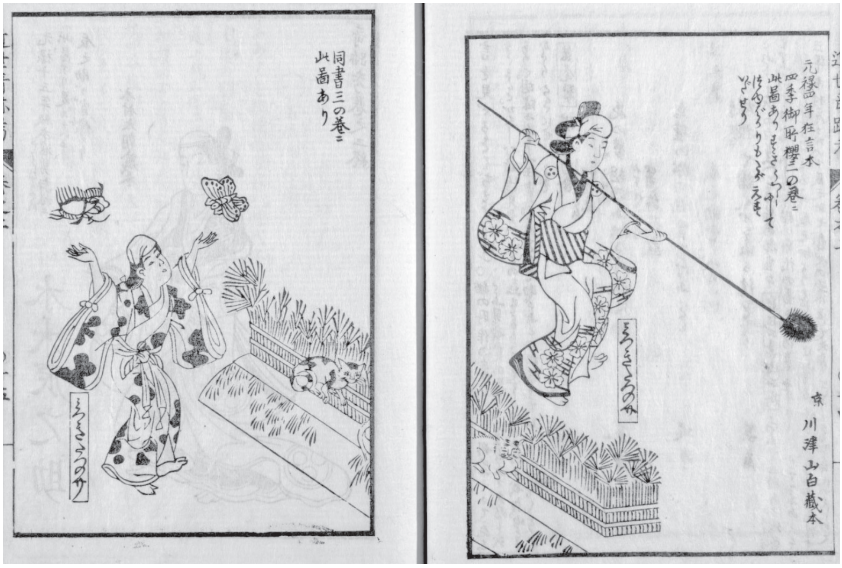


図6　山東京伝『近代奇跡考』より（鳥居清信『風流四方屏風（上）』（元禄13（1700））（国立国会図書館蔵））

3.3　薄雲太夫の物語とその展開

江戸期の猫ブームと関連して（場合によっては招き猫とも）語られる有名な説話がある．馬文耕[10]という文人が書いた『近世江都著聞集』の中にある．

> 其角[11]に「京町の猫通いけり揚屋町」という句がある．この句の「京町[12]の猫」とは遊女のことであるという解釈がある．しかし，其角は，人を動物や鳥にたとえるのは正しい俳句の読みかたではないと考えていた．この句は，元禄のころ，京町にある三浦屋の遊女が揚屋[13]に行くときには，禿に猫を抱かせて，猫には思い思いの美しい首輪を付け，猫を可愛がっていた．だから，遊女たちが皆，猫を連れて道を練り歩き，揚屋へ通う様子を，このように風流に表現したのだ．その頃，高級遊女た

10）1718-1759　江戸中期の講釈師／戯作者．幕政を批判風刺．
11）宝井其角（1661-1707）は江戸前期の俳諧師．
12）吉原の一部
13）高級遊女が客に会う場所．

ちが禿に猫を抱かせて，揚屋まで練り歩いたきっかけとなったのは，三浦市郎左右衛門の店にいた薄雲という遊女だった．遊女の中でも最上位に位置づけられる有名な遊女だった．高尾，薄雲という名前は，代々受け継がれる名前で，ここで言っているのは元禄7，8年から12，3年まで薄雲を名乗っていた三代薄雲のことである．この（三代）薄雲太夫は三毛の子猫をたいそう可愛がり，寝間や厠もともにするほどだった．あまりの溺愛ぶりに周囲の者たちは薄雲が猫に憑かれたのではないかと怪しみ，猫を遠ざけるよう薄雲を説得した．薄雲も怖くなり，猫を放逐することにした．しかし，猫は悲しげに泣き叫び，薄雲のそばを離れない．親方はもはや猫を殺すしかないと，脇差しで猫の首を切り落とした．すると猫の首は空を飛び，見えなくなった．あたりを探すと，猫の首は厠の下に潜んでいた大蛇を喰い殺していた．人びとは，猫が日頃の恩に感じて，薄雲を狙う蛇を殺したのだろうと言い合った．薄雲は猫の死を悲しみ，その亡骸を道哲（西方寺）へ葬り，猫塚とした．このことがあってから，遊女たちの多くが猫を飼い，禿にもたせて歩くのがならわしになったのである．

馬文耕「三浦抱女古薄雲が傳」『江戸著聞集巻之五』[14]（遠藤抄訳）

ここから一つには，当時のファッション・リーダーともいえる高級遊女たちが，猫をアクセサリーのように愛玩していたことがわかる．また別の読み方からすれば，これは遊女と猫の愛情物語でもあり，「猫の恩返し」的物語としても読める．この物語は，多くの江戸期の文筆家たちに言及され，よく知られた物語であったようである．「実話」と考えられており[15]，実際，西方寺には遊女の墓と猫の像も現存している（図７）．ただし，説話とのずれもある．西方寺は当時浅草聖天町にあったが，明治24年に巣鴨の現在地に移転

14）馬文耕（馬場文耕）1718?58.幕府を批判，風刺する講釈を行っていたが，美濃八幡藩の騒動を題材にしたことで罪に問われ，処刑された．『近世江都著聞集』（1757）

15）喜多村筠庭は『嬉遊笑覧』で，「この草子妄談多く取に足らず．これもいかが知らざれど，人みないへる事也」（巻十二上）と書いている．

した．ここに現存するのは，薄雲ではなく高尾というこれも有名な花魁の墓である．また猫塚は現在はなく，招き猫のような像が，その前に座っている．また西方寺自体，ただ，吉原の無名の遊女たちを葬った碑は高尾の墓の側に残されている．

図７　西方寺の猫像（2015.05.19　遠藤撮影）

この事件を下敷きに，江戸時代後期人気戯作者である山東京伝[16]は，『薄雲猫旧話』（山東京伝[17]作；歌川国貞[18]画）という作品（文化8～9年（1811～2））を書いている．扉には，先に述べた水木辰之助の「四季御所桜」の姿絵が載っており，また，次ページ以降も，源氏物語，猫の目で時間を計る方法，西行法師の猫エピソードなどが紹介されている．この当時の読本では，それまで人びとに知られてきたさまざまな知識，伝説，エピソードなどを人びとのイメージとして喚起しつつ，それらを再編集して新たな物語を想像していく，“Cut and Mix”の手法が使われていたといえよう．

京伝はこのほか，猫と柏木，女三の宮のモチーフを用いた『吾嬬森栄楠』（安永八年（1779）市村座顔見世狂言，桜田治助作）にも関わり，黄表紙『京伝

16）1761-1816

17）宝暦11年（1761年）- 文化13年（1816年）．江戸時代後期に人気を誇った浮世絵師，戯作者．寛政の改革により手鎖の処罰を受けた．回向院に墓がある．浅草寺に「机塚」．

18）1786-1865　後の三代歌川豊国．英一蝶に私淑．文政12年（1841年）刊行の柳亭種彦作『偐紫田舎源氏』の挿絵は「源氏絵」ブームを巻き起こし，歌舞伎にも影響したといわれている．

憂世之酔醒』（寛政二年（1790）刊）でもこのモチーフを使っている（棚橋2014）.

山東京伝は『忠臣蔵前世幕無（ちゅうしんぐらぜんせのまくなし）』（寛政6年（1794））という黄表紙も残している（図８）．これは『仮名手本忠臣蔵』のパロディで，鹽冶判官（浅野内匠頭）の前世は鳶職人で，井戸替えのときに取った鮒を持帰ろうとして，高師直（吉良上野介）の前世の猫に額を引っかかれ，その報いで，忠臣蔵では，判官が師直に「井の中の鮒」と罵られて師直の額を切りつけることになる，といった抱腹絶倒の趣向で物語が展開する．

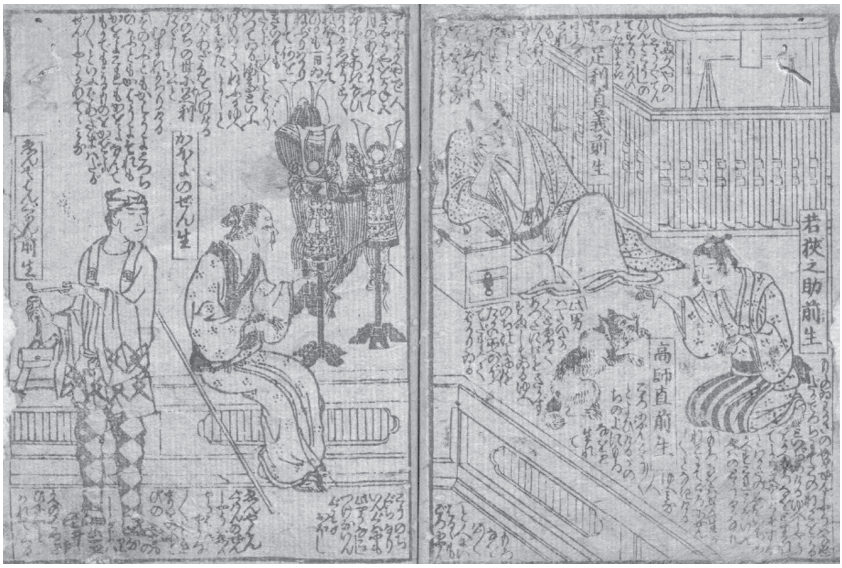


図８　『忠臣蔵世界の幕なし（忠臣蔵前世幕無）』山東京伝 作［蔦屋重三郎・出版］，寛政6（1794）序（国立国会図書館蔵）

京伝の弟であり，同じく戯作者として活躍した山東京山（1769-1858）も，猫を主人公とした『朧月猫草子』（山本平吉（出版），天保13-弘化3［1842-1846］）（図９）という読本を出している．この作品は，猫の日本への渡来から書き起こし，江戸期の猫の現実を見せつつ，山東京山が猫の言葉を解するようになったという設定で，猫たちの波瀾万丈の感情生活が描き出されている．ま

図９　山東京山『朧月猫草子　初編』（国立国会図書館蔵）

た，冒頭には，日本における猫の位置づけの変遷についても書かれている．山東京伝の『薄雲猫旧話』でもそうであったが，彼らの「猫もの」（猫関連作品）は，物語とともに「猫知識」共有を広め，猫ブームを拡散する効果を持ったともいえるかもしれない．

この『朧月猫草子』の絵を描いているのは，歌川国芳（1798-1861）である．国芳は，大の猫好きであり，浮世絵の猫ブームを起こしたとされるほど，多くの猫絵を残した（図10）．こうしてみれば，山東京伝や京山，三世豊国，国芳ら当時の人気戯作者／絵師らによって構成された，江戸後期の文化サロンが，江戸の猫ブームを〈文化〉として構成し，盛り上げていったといえる

図10 『其のまま地口 猫飼好五十三疋』歌川国芳，嘉永元年（1848年）

かも知れない．この点については，また後述する．

また，薄雲の物語絵は，豊国や月岡芳年（国芳の弟子）によって幕末，明治にも描きつづけられている．彼らにとって象徴的な意味をになった物語だったのだろう．

3.4 「猫」への想いと猫塚

時代が下るにつれて，猫は高級愛玩動物というより，日常的に生活空間をともにする存在へと変わっていった．庶民の家の魚をくわえて逃げたり，小動物を殺したりする，野性的性質を残したまま，人間たちと共生するようになったのである．その結果，一般庶民が「猫に恩返し」される話も伝えられるようになる．

例えば，『藤岡屋日記』第三巻には「猫報恩の事」と題する次のような話がある．

文化十三年丙子年の三月頃の事だという．深川の時田喜三郎という富家の飼い猫に関する話．

この家に毎日出入りする近所の肴売りの利兵衛は猫好きで，肴を売りに

行く毎に，魚を少しずつこの猫に与えていた．そのうち利兵衛は，からだの具合が悪くて肴売りにも歩けず，もともと貧乏暮しなので朝夕にも困る有様だと，近所のこと故，時田の家のあたりでも噂がひろまった．

すると或夜のこと，肴屋へ一匹の猫が入って来た．見れば時田の猫である．よく来たなァと，有合せのなまぐさ物を食べさせると，猫はくわえていた壱両小判をそっと置いて行った．利兵衛は不思議に思ったが，差迫った入用が多いので，その金を取りあえず遣って一息ついた．

一方，時田家では金壱両が紛失したので家内の者を吟味し，召使らも迷惑させられたのであった．そんな折からまた，よそから金子十三両が入金した．紙に包んでおいたその金を，猫がくわえて駆け出したので，皆で追掛けると，紙包みのために紙だけくわえて，金は道に落としてしまった．憎い奴だ，この間の一両もこいつのしわざだ，泥棒猫めと，皆で寄ってたかって猫を敲き殺してしまったというのである．

さて肴売りの方は，先の一両のお蔭で商売の元手も出来，病気も全快したので，久々に商いに出た．まずいつものように猫に肴をくれてやろうと思って時田をたずねると，あの猫めは金を盗んだ泥棒猫だから打殺したと，先日来のいきさつを話され，肴屋も，さては猫があの一両の金をくわえて来たばかりか，後の金も持って来ようとして殺されたのだとさとり，ふびんの事をしたと思い，主人の喜三郎に向かい，猫が一両くわえて来てくれたものに相違ないと，しみじみ物語った．喜三郎も感心し，回向院の水子墓の脇に，小さい猫の墓を立ててやった．その墓には，正面に値善畜男と彫り付け，脇に時田喜三郎猫と記された．（巻三）（『江戸巷談藤岡屋ばなし』p.115）

この話もよく知られたようで，『宮川舎漫筆』[19] 巻之四にも同じ話が掲載されている．また脚色されて落語「猫定」ともなっている．両国回向院には，現在もこの「猫塚」が存在し，「鼠小僧次郎吉」の隣で，多くの参拝客を集

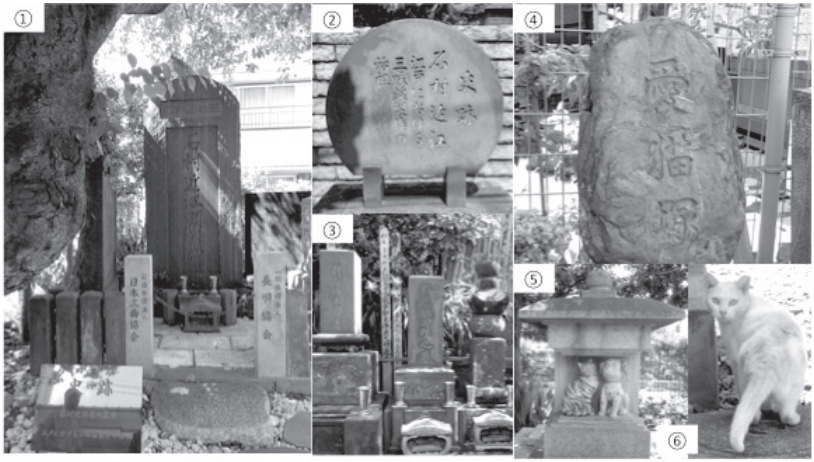
19）宮川政運著，文久2年（1862），三笠堂

図11　回向院の猫塚と鼠小僧の墓（2017.1　遠藤撮影）

めている（図11）．ちなみに，回向院には山東京伝の墓もある．

別の意味の猫塚もある．三田魚藍坂の大信寺は，別名三味線寺とも呼ばれている（図12）．三味線は，戦国時代に琉球の三線が伝来し，改変されたものとされる．三線はニシキヘビの皮を用いるが，三味線では猫や犬など小動物の皮が用いられた．江戸で三味線製作を始めたのは，京から来た二代目石村近江（1636年没）とされる．石村近江が大信寺に葬られ，その後代々の石村近江の墓所とされたため，三味線寺と呼ばれるようになったという．大信寺には猫塚もある．三味線製作のために猫の皮を用いたからかも知れないが，「愛猫塚」と彫られているので，単にペットの死を悼んだものであるのかもしれない．

その他にも東京（そして日本全国）には，数多くの猫塚が存在している．おそらくかつてはもっと多くの猫塚が建てられていたのだろう．猫塚は養蚕神でもあった（遠藤2017）が，江戸期の人々の感情生活にとって，〈猫〉が大きな位置を占めていたことをうかがわせるものでもある．



①石村近江代々の墓　②石村近江史跡碑　③杵屋勝五郎の墓　④愛猫塚　⑤ペット供養塚　⑥境内の猫

図12　大信寺（港区三田4丁目）　遠藤撮影

4.「招き猫」の誕生

4.1 「招き猫」を語る説話群

そんな猫をキャラクター化した「招き猫」人形は，江戸後期，都市部を中心に，つくられはじめたとされる．

「招き猫」の由来についてはいくつもの説話があり，それらの説話と結びつく寺社も数多い．江戸の代表的なものを以下に挙げる．

①世田谷豪徳寺は現在は立派な寺となっているが，かつてはひどく貧しい寺だった．

当時の和尚は，たいへん猫好きで，貧しい自分の食事を猫にわけて，わが子のように猫を可愛がっていた．ある日和尚は猫に「私はこんなに可愛がって育てているのだから，いつか恩返しをしておくれ」と言った．すると数日後，門のあたりが騒がしいので和尚が出て見ると，鷹狩の帰りらしい武士が5，6人いて，「われわれがこの寺の前を通りかかると門前に猫がうずくまっていて，われわれを手で招いた．少し休ませてほしい」という．

和尚が武士たちを招き入れると，急に激しい夕立となり，雷がとどろいた．和尚は落ち着いて説法すると，武士はたいへん喜び，「私は彦根城主井伊直高[20]である．猫に招かれてこの寺に来たのも何かの仏縁だろう」と，その後，豪徳寺を井伊家の菩提所として，多くの田畑を寄進した．おかげで豪徳寺は壮大な寺となり，「猫寺」とも呼ばれるようになった．和尚は猫の墓を建てて，この猫に似せた像をつくって「招福猫児（まねきねこ）」として祀ったところ，家内安全，営業繁盛，心願成就の霊験あらたかと大評判となった（2015年5月18日に豪徳寺でいただいたチラシの内容を遠藤が現代語訳）．

②新宿区西落合の自性院は「猫寺」としても知られているが，「文明九年（一四七七）に豊嶋城主豊島左衛門尉と太田道灌とが江古田ヶ原で合戦した折に，道に迷った道灌の前に一匹の黒猫が現れて自性院に導き危難を救ったため，猫の死後地蔵像を造り自性院に奉納したのが猫地蔵の起りという話も伝えられている．

さらにまた，江戸時代の中頃明和四年（1767）に貞女として名高かった金坂八郎治の妻（覧操院孝室守心大姉）のために，牛込神楽坂辺の鰭屋弥平が猫面地蔵像を石に刻んで奉納している．この猫面地蔵は秘仏となっており，毎年二月の節分の日だけに開帳されている」（『ガイドブック新宿区の文化財（4）』新宿区教育委員会，1982，p.115-6）．

③浅草花川戸に住む老婆が貧しさゆえに愛猫を手放したが，夢枕にその猫が現れて「自分の姿を作り祀れば福徳自在となる」と告げたので，そのとおりにしたところ利益を得たことが評判となり，今戸焼の土人形にして浅草寺三社権現（現・浅草神社）鳥居辺りで老婆によって売りだされ大流行になった（『武江年表』嘉永5年（1852））

④浅草寺梅園院境内でひねり土人形を渡世をしていた老夫婦の愛猫が知り合いの飼っていた小鳥をあやめてしまったことに罪を感じて自ら井戸に

20）万治2年（1659）没（『新編武蔵風土記稿』巻之51　荏原郡之13による）

身を投げた．その後，老婆の夢に猫が現れ非を詫び「今後はあなたを守りいかなる病でも全快させる」と告げ，仲間の今戸焼屋が作った猫を拝んだところたちまち病が治ったことが評判となり，浅草寺三社権現（現・浅草神社）鳥居辺りで鬻がれ大評判になった（『藤岡屋日記』 嘉永５（1852））

これらの招き猫伝説は，二つのタイプに分けられる．タイプ1は，①と②が該当し，寺の縁起（社寺の起源・由来や霊験などの言い伝え）を，有徳の僧が可愛がっていた猫によって後援者を得たという伝承である．タイプ２は，③と④が該当し，招き猫人形の売り手が可愛がっていた猫によって福を得たという物語である[21]．タイプ1もタイプ２も「猫の報恩（恩返し）」というテーマは同じである．タイプ１の方がタイプ２よりもやや時代が古いかと推測される[22]．

4.2 「招き猫」の現実

むろん，それらの由来はいずれも風説（都市伝説）であるが，なぜ「由来の風説」が必要なのか．そこに，「縁起物」の位置の微妙さが窺われる．

より端的に，「招き猫」という置物（商品）の発生については，次のような説もある．

天明年間（1781-1789）江戸の向両国に金猫銀猫という売色店があり[23]，

21）③と④は同じ説話の異なるバージョンとも考えられる．

22）記述されている年号をそのまま信じることはできないが．

23）斎藤が何を典拠としてこの説明文を書いたかは不明である．一方，中野栄三（編著），1963,『性風俗事典』雄山閣には,「寝子」の説明（p.255）の中には,「両国回向院近くには「金猫」「銀猫」と呼ばれた私娼がいた」と記述されており，やや食い違っている．また中野も参照している宮武外骨「売春婦異名集」には,「享保［1716-36］の末頃より江戸にて私娼たる踊子（芸妓）を「猫」と呼び，その寺院の境内に居しを「山猫」と称し，その「山猫」を玉代によりて「金猫」また「銀猫」と異名せり．『奴凧』に「天明［1781-89］の頃まで，両国橋の東回向院前に隠し売女あり．金一分を金猫といい，銀二朱を銀猫といいしなり．その頃川柳の前句付に，回向院ばかり涅槃に猫も見え，という句ありしも可笑」と見ゆ．大阪にてもこの金猫銀猫の称ありしか．嘉永［1848-54］の『皇都午睡』に「堀江，これはまた一風立て，気性にも外々の遊所より異なる所あり．女郎にも金猫銀猫二座の一本付なぞと，深き口授あり」と見ゆ．天保［1830-44］

猫が手（前足）で顔を洗えば客が来る，という俗信から，金銀を彩った招き猫を店頭に飾ったのが起こりらしい．その後浅草の今戸で土焼きで盛んに作られるようになり，猫と狐は今戸焼きの代表的なものにまでなった．ことに嘉永年中の「丸〆猫」が優れている（斉藤良輔編，1997，『郷土玩具辞典』p.327）

金猫銀猫の招き猫と丸〆猫との関係は不明である．矢田（1921）は，薄雲太夫を慰めるために木彫りの猫を贈ったのが招き猫の初めと述べている．前節に挙げた③，④の説話が丸〆猫と関連したものと推測される．矢田（同上）もやや細部に違いは見られるものの，花川戸の老婆が丸〆猫を売って繁盛したと書いており，これを薄雲太夫の模倣であると述べている．ただし根拠は分明ではない．

丸〆猫は，図13に示すように，現在一般的な正面を向いたポーズではなく，横向きで顔だけ正面に向いているポーズをとっている．また，初代広重が，

図13　今戸焼 丸〆猫．嘉永安政風型[25)]

図14 「浄瑠理町繁花の圖」（一部）
廣重（初代），伊場屋仙三郎（出版），
嘉永5［国立国会図書館蔵］

の川柳に「今西行は銀猫を買いに行き」といえるあり．僧徒の堕落を風刺せし句なり．

浄瑠璃の物語に見立てて街の繁盛ぶりを描いているが，この中にも，西行に見立てた[24] 店の主人が丸〆猫を売っている様子が描かれている（図14）．よほどの人気だったのだろう．

『藤岡屋日記』にも，嘉永五年には，丸〆猫の人気をうけて，「おまへ高輪でおたのさん，おそばがお好でするするすす，ぬしハ新宿おかめさん，てんてん手のある白糸さん，丸く納る丸〆猫，にゃんのこったにやうにやう，御客招き招き，風団の上で一服せふ．」といった「三獣拳」や，「浅草の奥山で，御客どんノ，枯（招ヵ）き猫，おばあさんひとりでおまへが丸〆猫」という江戸名所大津絵節が流行ったとの記載[25] がある．

丸〆猫に関する記事は，4.に述べた③，④の説話以外にも存在する．例えば，『巷街贅説』の嘉永5年の記事に次のようなものがある．

浅草あたりに貧しい男がいた．野菜など売り歩いて，何とかその日暮らしをしていた．老父を養い，夫婦仲良く暮らしていた．ところが老父が病気になり，身体が痛いというのでなでさすって日々介抱した．そのため商売にでられる日が少なくなり，食事にも事欠くようになった．この家には，長く飼っている猫がいた．男は冗談でこの猫に，「私たちでさえ食べ物に困っているのに，おまえには食べ物を与えてきた．恩を感じてくれるなら，どうにかしてくれないか」と云ってみた．もちろん返事など無かったが，しばらくすると猫の姿が見えなくなった．3，4日して，老父が猫のことを尋ねた．「どこかに行ってしまったようだ」と答えると，老父は「猫は毎夜やって来て，私の上に乗って眠る．腰が痛いと腰の上に乗る．肩が痛いと肩の上に乗る．猫が乗るとその部分の痛みがなくなる．面白い話だと思って，本当に猫が来るのか気をつけていたけれど，猫を見ることはなかった．それでも，父は毎夜猫が来ると言い，病気も快方に向かっていった．

24）西行が浄瑠璃における人気キャラクターであったことからここに登場するとされているが，『吾妻鏡』「西行銀猫」の説話も下敷きにしている可能性も考えられる．

25）『藤岡屋日記　第三十八』（第5巻：98）

26）https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/e/e0/今戸焼_丸〆猫_嘉永安政風型.JPG

あるとき，知らないひとがたずねてきて，「こちらに猫はいますか？」と聞く．「長く飼っていた猫がいたが，最近いなくなってしまった」と答えると，「夢のお告げがあって，こちらから猫を買いたい．生きている猫でなくてもよい．木や土で作った猫でもあれば，買いたい」とたっての願いに，やむなく近所の番小屋で手あそびで作った人形を売ると，大変喜ばれた．そんな人がつぎから次へとやって来くるので，親子3人相談して，今戸の土で焼いた猫を買いだしておくと，買いに来る人が日に日に増えて，野菜よりもよく売れた．すると，家も豊かになり，父の病気も治ってきた．代わりに夜も猫は来なくなった．猫が恩返ししてくれたのだろうと言う事で，猫塚を建てて菩提を弔うとともに，今戸焼きの猫を買って去年の冬から浅草寺の境内に店を開き，猫を売り出すと，聞き伝えて次々と人々が買いに来るようになった．初穂料と云ったり，御神酒料との名目でお金をおいていった，春頃になると，座布団も作って一緒に売るようになった．またさまざまな大きさ，麤密のものを作り，張り子の品も置くようになった．

「（塵哉翁「浅草の猫」（嘉永五年の記事）『巷街贅説』
（文政十二年～安政三年（1829-1857）））

類似の説話が異なる主人公に替えて複数語られたということは，伝聞による聞き違いや脚色もあるだろうし，「丸〆猫」の販売者が複数いたことを示しているのかもしれない．事実，新宿区水野原遺跡や文京区千駄木三丁目南遺跡など複数の近世遺跡から異なる陽刻のある丸〆猫が出土している[27]．

4.3　招き猫の居場所

都市部では，「丸〆猫」あるいは「招き猫」は，縁起物」として，花柳界や商店に飾られた[28]．

27）東京都埋蔵文化財センター調査報告書230集「文京区千駄木三丁目南遺跡」2009，新宿区生涯学習財団「東京都新宿区水野原遺跡」（第二分冊）2003
28）農村部では養蚕神として祀られた（遠藤2017参照）．

表１　（神）狐と（招き）猫の意味論・形態論的相似

	（神）狐	（招き）猫
意味論的相似	屋敷神	「家に付く」
	農耕神（鼠を捕る）	
	養蚕神（鼠を捕る）	養蚕神（鼠を捕る）
	商業神	商業神
	花柳界の信仰	花柳界の信仰
形態的相似	片手をあげた形態	片手をあげた形態
	左右一対	一匹で独立しているようだが，右手（前脚）を挙げている猫は金運を招き，左手（前脚）を挙げている猫は人（客）を招くとされ，元々は左右一対だったのではないかとも考えられる．

二代長谷川貞信による役者絵『俳優楽屋影評判坂東寿三郎』では，招き猫が楽屋の神棚に飾られている．この位置は，かつて一般的に祀られていた稲荷狐を想起させる．招き猫は稲荷狐の代替アイコンといえないだろうか．

また，豊川稲荷や浅草寺をはじめ，都市や参詣客の多い寺社の参道の土産物店では，稲荷狐と招き猫が並んで売られており，それらの位置および形態の親縁性は明らかである．機能的にも，農業や養蚕における益獣であることなど，共通性が多々観察される．

そこで，稲荷神社の総本山である伏見稲荷大社を観察してみよう．ここは，全国数千の稲荷社の総本山であり，創建は和銅年間（708-715），伊侶巨秦公（いろこのはたのきみ）によるとされる．主祭神は宇迦之御魂大神（うかのみたまのおおかみ）である．

毎年関西一の（全国では4位）の初詣客を集めている．しかも近年は外国人にも人気（トリップアドバイザー社による外国人に人気の日本国内観光地2014年，2015年1位）らしい．また，「いなり，こんこん，恋いろは.」で聖地巡礼の目的地ともなっており，驚くほど賑わっている．

参道にはずらりとみやげ物店が並んでいる.

ここでもやはり，神狐と招き猫が隣り合って並んでいる.

これはそもそも，稲荷の神使としての狐のイメージが，都市化にともなって，猫にシフトしていったと考えることができるのではないか.

それを裏付けるように，神狐と招き猫を比較してみれば，そこには多くの相似が観察されるのである（表１）.

4.4　猫伝説における猫と狐の混交

江戸期の猫説話でも,「猫」と「狐」が区別されていなかったり,「狐憑き」に対応する「猫憑き」の風説がいくつも残されていたりする.

代表的なものを以下に挙げよう.

①「狐と交りて生れし猫は, 其年功なくとも物言ふ事也」(「猫物を言ふ事」『耳嚢』)

②「麻布笄橋堀田家下屋敷で，狐のせいか怪しいことがたびたび起こり，死ぬ人もでたので，狐つり名人を呼びよせ捕らえたところ，大犬より，大きく，尻尾二またの大古猫だった.」(本間秀高『諸國見聞圖會』)

③「是の月（6月)，牛込横寺町長五郎店清吉妻きんの連れ子まつ十一歳，食物振舞ひ猫に異ならずとの噂あり．見物に行く者多し.」(「猫つきの少女」『武江年表』(嘉永3年))

猫と狐を同類と見なす感覚は，農村部の昔語りでも見られる．例えば，日本昔話学会が収集した奈良県月ヶ瀬村の話の中にも，オシロザカで妖異に取り憑かれた経験を語るものがあるが, 憑いたのは「まあ, 狐か猫か狸か」[29] と，厳密な区別をしていない.

福島・信夫山の「ねこ稲荷」の由来説話では「かつて御山村の名主であっ

29）阿部奈南・進藤秀樹・垣崎仁志，2001,「月ヶ瀬村の伝説と世間話」，日本昔話学会・編，『本格昔話と植物　　昔話ー研究と資料ー第二九号』三弥井書店，p.166-184

た西坂家は，信心深くよく働く夫婦だったが，子宝には恵まれなかった．ある夜，観音様が夢枕に立って「汝らにねこを授ける」とお告げがあり，翌朝庭に三毛猫があらわれた．夫婦は「タマ」と名付けて大切に育てた．タマは夫婦になつき，村のネズミを取るようになり，養蚕の盛んだった村ではたいそうかわいがられた．一方，信夫山に住んでいた信夫の三狐の一匹，御坊狐は，仲間の鴨左衛門にだまされ，神通力の尻尾を失ったが，「タマ」に出会い，今までの悪行を諭されて改心し，タマと御坊狐はすっかり仲良くなり，ともにネズミを退治するようになった」とされている[30]．また長野には，「築城する場所を探していた主従の目の前に，白狐が現れて道案内をしてくれた．夜になると狐火のおかげで明るかった．翌日気づくと，主従は築城に適した場所にいた．そこに坂西の城をたて，白狐を祀った．」（石川正臣，1984，「飯田の伝説　飯田の烏」『伊那』32巻1号（通巻668号）伊那史学会，p.13-15）という伝承も残されており，豪徳寺や自性院の招き猫伝説の原型ともいえる．

4.5　京都の招き猫伝説

伏見稲荷の狐が招き猫の発生源であるとすると，関西にも「招き猫」伝承があるはずである．そして実際それはある．

民俗学者の井上頼寿が1933年に著した『京都の民俗志』には，次のような猫伝承が記録されている．

①檀王の招き猫－檀王の主夜神の神使は猫で，招き猫を売っている．緑色の猫で右手を挙げている．そのため江戸時代には民間では右手を挙げた招き猫はつくらせなかった．

②東福寺の涅槃図の猫．

③出水・光清寺の猫絵馬は夜になると出て行く．

④称念寺－称念寺は猫寺と呼ばれている．

⑤西本願寺の天井には八方睨みの猫が描かれている．

30）福島市公式サイト「養蚕関連の神話」（http://www.city.fukushima.fukushima.jp/bunka-bunkazai/fureai/kakonotenji/fureai0）

⑥下京には「猫間」という地名がいくつかある.

⑦東寺には「猫間の戸」「猫間の障子」「猫の曲」などがある.

このうち，招き猫伝承と明らかに関連するのは，檀王法林寺，東福寺涅槃図，称念寺である.

檀王法林寺の公式サイトによれば，慶長十六年（1611）の寺を復興した袋中上人（1552-）が感得した主夜神尊の神使が黒猫であったことから，江戸の中頃から主夜神尊の銘を刻んだ招福猫が作られるようになったという.「本居宣長の日記に「檀王法林寺の万日，主夜神の開帳始まりけるよし聞は，檀王へまいりぬ，此主夜神と申すは，近きころ人のふかく信じ仰ぐ神にてまします.」（宝暦六年（1756）８月４日の条）と記録されていることからも，18世紀中頃から主夜神尊信仰が盛んになったと推測されている[31].

東福寺には，京都三大涅槃図の1つと言われる涅槃図がある．室町時代の画聖，兆殿司（明兆）によって描かれたもので，縦約12m／横約6mと非常に大きい．一般に涅槃図に猫が描かれることは稀とされるが，東福寺の大涅槃図には，猫が描かれている．そしてこの猫は「魔除けの猫」とされ，次のような縁起が伝わっているという.「往昔畫聖兆殿司（おうせきがしょうちょうでんす），大涅槃像（だいねはんぞう）を描かんとしける時，一匹の猫，何処よりか絵具を咥え来たること度々なり．殿司，之を憐れみ猫は由来罪業深重（ゆらいざいごうしんちょう）にして，佛の慈悲にも浴し兼ねたるものなるが，今佛涅槃の絵具を持ち来たりし功徳に依り，罪業消滅魔障退散（ざいごうしょうめつましょうたいさん）し，速やかに佛果を成ぜりとて畫中に猫を加へぬ．世人傅へ聞きて，之を魔よけの猫と称して珍重しけるが，今復ここに其形（そのかたち）を模して，弘く十方に頒ち，世の篤信の人をして悉く魔を除き福を得せしめんとて，二夜三日の祈念を籠め造りし像なりされば，深く念じて其霊験のあらたなるを知るべし」[32]．こうして東福寺では，招福猫を授与するようになったという.

31）http://dannoh.or.jp/history/history03.html
32）http://www.tofukuji.jp/function/nehan_e.html

称念寺もまた，招き猫伝説をもっている．公式サイト[33]によれば，慶長十一年（西暦1606）に開基上人が松平信吉公土浦城主の帰依を受け建立され，栄えた．しかし，信好考が没すると，衰退に向かった．三代目住職還誉上人は一匹の猫を飼っていた．寺禄を失った和尚は自分の食をけずっても愛猫を手放さなかった．しかしある夜，托鉢からかえってきた和尚は，世にも美しい姫御前が優美な衣装を身にまとい月光をあびながら踊って居るのを見た．本堂の障子には，愛猫の影としてボウッと映っていた．和尚は立腹し愛猫を追い出した．愛猫は数日後，和尚の夢枕に立ち，「明日，寺を訪れる武士を丁重にもてなせば寺は再び隆盛する」と告げた．翌朝その通りに松平家の武士が訪れ，亡くなった姫がこの寺に葬ってくれるよう遺言したと伝え，以後松平家と復縁した寺は以前にも増して栄えた．称念寺でも招き猫を授与している．

また，大阪の四天王寺にも，招き猫伝承があったようだ．斎藤（1997）には，「大阪市天王寺区四天王寺境内でかつて売っていた土焼きの猫．聖徳太子を祀る太子殿から北に通ずる俗称「猫門」にある木彫りの眠り猫を模したもの．これは日光の眠り猫と同じく左甚五郎の作と伝えられる．昔，この猫が元日の朝には必ず鳴くという伝説があり，江戸時代元禄（1688-1704）のころ，その姿を土で作り門の傍らで売ったのが始まりという」との記述がある．

これらが，江戸の招き猫伝承とほぼ同じ内容であることは明らかである．特に称念寺と豪徳寺の伝承はほぼぴったりと重なり合う．年代を考えると，京都，大阪の伝承の方が古いようである．

こうしてみれば，京阪の伝承が招き猫とともに江戸に伝わったと考えてよいかもしれない．では，その伝播は何によって媒介されたのか．

33）http://www.nekodera.net/html/nekostory.html

5．なぜ江戸期に狐は猫に化けたか－脱宗教化と社会不安

5.1　信仰の変容

時代が進むにつれて，人びとの信仰のあり方も変わってくる．

かつてのように，素朴な信仰心のもとで，あるいは自分たちのアイデンティティの核として寺社を位置づけることが薄くなっていく．

一方，幕府は，キリスト教禁教の徹底と，民衆の管理を大きな目的として，檀家制度をつくった．慶長十七（1612）年にキリスト教禁止令を出し，キリシタン改めの責任を檀那寺においたのである．人びとは檀那寺に帰属することによって，自分の身分や宗派の保証とした．これを寺請という．檀那寺は寺請をする代わりに，檀家の葬儀や法事などを行う権利を持ち，檀家にそのための金銭その他の負担を課した．これによって，檀那寺は財政的安定と，社会的権力を確保することができた．

とはいえ，十分な檀信徒を確保できなければ，寺の運営はおぼつかない．

井伊家が檀家となる経緯を語る豪徳寺の招き猫説話は，まさにこの有力な檀家を失った寺院の悲哀を語っている．檀家を得られない寺は，現世利益を喧伝して参拝客を集めるという経営手法をとった．「招き猫」による「招福」祈願をうたう豪徳寺は，井伊家という潤沢な檀家を得て「回向寺」の地位を確保しただけでなく，「招き猫説話」によって「祈祷寺」の機能をも獲得したのである．

一方，このような寺の変容は，人びとの仏教に対する意識も変えた．寺は，「生きることとは何か」という哲学を説く場ではなく，むしろ先祖供養の場としての意義が大きくなった．いわば，世界宗教としての仏教から，むしろ死と再生を語る原始信仰へと回帰する傾向がみられるようになったのである．

社会学者のM.ウェーバー（M. Weber, 1864-1920）は「儒教のばあいには，呪術は現実に救済をもたらすものと考えて放置された」（『宗教社会学論選』

p.168）と述べているが，日本ではまさに世界のなかでも先行的に社会の脱宗教化が進んだとされる．しかしにもかかわらず，俗信や占いなどの擬似宗教的行為を半ば娯楽的に楽しむ傾向は，日本社会では現在も根強い．筆者が2015年に行った「生命倫理に関する世論調査」[34] からもその傾向は明確に現れている（遠藤2016，遠藤2018参照）．

5.2　江戸の流行神と稲荷ブーム

江戸期の招き猫ブームの背景には，日本社会の都市化，脱宗教化，貨幣経済化の潮流があり，また他方で，疫病や自然災害に伴う社会不安の増大があった．

『武江年表』で，浅草寺境内の丸〆猫売りが評判になった嘉永五年（1852）だけの記事を見ても，大小の火事が多数あり，甚大な被害を出している．彼岸すぎても暖かくならない，夏の大風雨などの天候不順，皆既月食，部分日食，病犬多数，ロシア船浦賀へ来航など，不穏な事件が多発している．それに対応するかのように，寺院のご開帳や奇譚の記事も多い．たとえば，「7月12日，白金村の紙漉きの男が二本榎の呉服屋に頼まれて商品を他家へ運ぶ途中，盗賊に出遭い，刀で脅された．夢中で祐天上人の名号と大山不動尊の画像に祈った．はっと気づくと，名号と画像に刀傷が残っており，自分は無事だった」「中の郷瓦町長寿寺で，土を掘ると，金銀双身の歓喜天像が出てきたのでこれを祀った」などである．「浅草猫の由来」もこれら奇瑞譚の一つ[35] であり，人びとはそれにあやかろうとして店に殺到したのである．

このように，奇瑞の風説にあやかろうと人びとが集まる現象は，「流行（はやり）神」として度々記録されている．宮田（2006）は「流行神」について，次のように説明している．

34）調査主体：遠藤薫，調査実施：2015年9月，調査法：インターネットモニター調査（国勢調査による県別，性別，年代別割当），サンプル数：5168

35）他に比べて非常に長い記事となっているので，注目度が高かったことがうかがわれるが．

はやり神という現象は，通時的な現象であって，古代・中世・近世・近代を通じて絶えずくり返しあらわれるものであった．一般には社会的な不安が高まると，下級宗教者たちの託宣が盛んとなり，いわゆる前兆・予兆という現象が人々の日常生活の中で，非日常的な状況として盛んにおこるといわれている．

江戸時代の「おかげまいり」と「ええじゃないか」という，くり返しおこった狂熱乱舞の状況がその点をよく説明するものとされている．ひっきりなしにカミやホトケがはやるという事態が，江戸の初頭の段階，寛永，慶安のころ，次には近世の中期，享保年間を中心とした時期，そして幕末の文化･文政以後の段階に，はやり神が急速にでてきたといわれている．（宮田：49）

なかでも，「稲荷神」は流行神の筆頭ともいえる存在だった．山路によれば，「「伊勢屋稲荷に犬の糞莞新興都市江戸を表現したこの言葉は，五代将軍家綱が出した「生類哀れみの令」を，庶民の側が密かに批判したいい方で，「犬の糞」に主眼があるともいわれるが，江戸の街には稲荷の祠が多かったのも，また事実である．天保五年（1834）刊の『祠曹雑識』には，江戸の稲荷番付として有名稲荷社百六社が挙げられているが，裏長屋で祀る稲荷祠なども勘定すれば，実際には四千社以上が祀られていたともいわれる」（p.8）．

稲荷神はもともと農業神であり，江戸開府前から多くの地域の信仰を集めていた．また開府後は，大名屋敷のなかに屋敷神として祀られるものもあった．大名家の屋敷神でありながら，流行神になったものとしては，太郎稲荷が有名である．『武江年表』には，次のような記述がある．

○今年（享和３年（1803））二月中旬より，浅草田圃立花侯御下藩，鎮守太郎稲荷社利生あらたなるよしにて，江戸並びに近在の老若参詣群集する事夥しく（余り群集しける故，後には朔日，十五日，二十八日午の日開門也），翌文化元年に至り弥（いよいよ）繁昌し，奉納物山の如く，

道路には酒建茶店を列ねて賑はひしが，一，二年にして自然に止みたり（其の時の草紙，一枚絵，小唄の本あまたありし．文化元年抱一上人画会の時，「絵をかくか願ひかくるか此のくんじゆ太郎さまへか屠龍さまへか」）．（『武江年表』

流行神は，一時熱狂的なブームを巻き起こし，一年から数年ですっかり廃れてしまうのが常だった．（ただし，完全に消えてしまうというよりは，流行神ブームそれ自体がそうであるように，長いスパンで流行を繰り返すものも多かった）．「招き猫」もこうした流行神の一つだったのではないか．流行神ブームは，やがて江戸から東京への歴史変動へと接続する．

5.3　神仏像と玩具の間－伏見人形と稲荷信仰

「招き猫」を別の観点から考えてみよう．

先にも述べたように，日本の稲荷信仰の拠点は，伏見稲荷である．伏見は，同時に土器や土人形制作の発生地でもあった．斎藤（1997：p.398）によると，その経緯は次のようである．

奈良朝以前から伏見深草に土蒲した土師部の埴輪，土器作りから発生したものといわれる．「日本書紀」垂仁天皇の条によると，皇后日葉酢媛命が斃去の際，野見宿禰が君王の陵墓に生人の埋立殉死の悪習を説き，大和国出雲在の土師百人を喚び集め，人馬並びに種々の物型を造作して天皇に献じ，これを陵墓に埋め立て，後世の法則とすることを請い，勅許の上その土物を陵に樹てた，とあるのが埴輪の起こりとされている．土器作りとしての土師の職はすでに垂仁帝以前からあったことが知られるが，垂仁帝当時それを統轄する土師部の職名が誕生．野見宿禰が土師職に任命され，本姓を土師臣と改め，朝廷の衷葬の土偶や日常用いる土器作りを司った．土師部は摂津（大阪），山域・丹波（京都），伊勢（三亜），但馬（兵頤），因幡（鳥取）各地にも散在していたが，大和国（奈良）の士師部が山城国

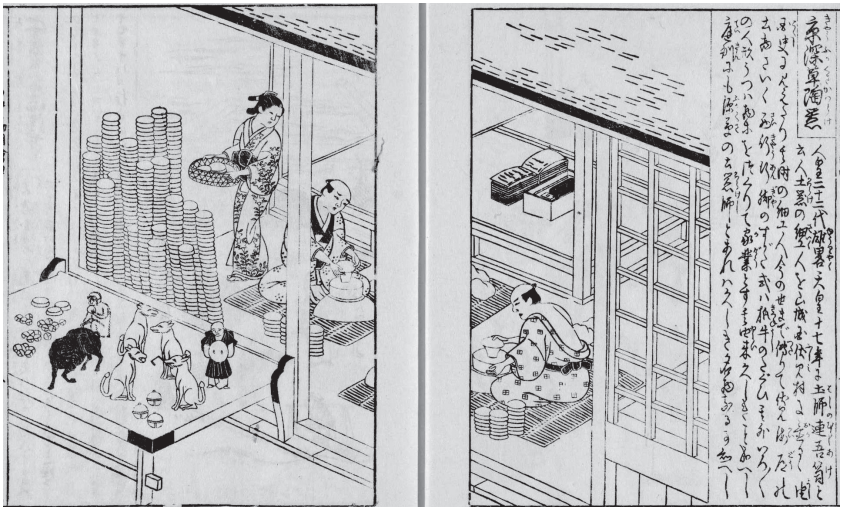


図15　伏見人形の工房　『日本山海名物図会』第4巻（平瀬徹斎 編，塩屋卯兵衛（出版），寛政9［1797］求板,国立国会図書館蔵）

俯見（伏見）に陶地を賜わって移住．故郷の菅原の伏見の里の名をとってここに定蒲したのが地名の起こりともされている．

土師部時代を過ぎるとそれまでの祭祀用の土器類から，日常の生活用品製作の陶器師へ次第に発展して独立した家業となり，やがてその余技として人形が生まれてきたと思われる．平安朝時代後期の久安年間（1145-51）には宮中御用の焼物師として深草焼きを製作していたことが記録に見えているが，元来，伏見深草付近は古くから帰化人の秦氏の居住地で，稲荷山に稲荷神を祀ったのもこの氏族であり（『山城風土記』）人形製作の技法も秦氏一族の伝来によるものという見方もある．

戦国時代を過ぎ，社会に平和が戻ると，人形玩具の生産が発展を始めた．『工芸鏡　巻二』（横井時冬・著，六合館・出版明治二七年（1894）刊）によると，「鵤幸右衛門は元備前宰相浮田秀家の長臣林玄蕃の家来にて一時浪々の身となり天正中伏見稲荷村に住居し稲荷山デンボ池の土を堀来りて鈴デンボ小判乗狐布袋一文おやま人形類を製造す，人呼びて人形屋幸右衛門といふ」

（p.5）とある．また一説には，江戸期の幕開けとともに東福寺門前に住んでいた人形幸右衛門という人物が伏見人形を創始したとも言う（斎藤1997：17）．いずれにせよこの頃，商品としての人形生産が始まったと考えられる．

元禄三年（1690）刊の「人倫訓蒙図彙」には「童子のもてあそび物一切此所にあり，諸方の細工人おもひおもひのあみたてをつくり此家にもちきたる．ただし紙薄板等をもって造り雑品の物なり，五条橋（京都）の西に此たな（店）あり」と，「持遊細物屋」という子ども向け玩具店を紹介している．

平和が続くにつれ，玩具生産はさらに発展し，「江都二色」（北尾重政画，安永二年（1773）刊）や『嬉遊笑覧』（喜多村信節，文政一三年（1830）刊）などには，数多くの玩具が紹介されている．

斎藤は，「京都の伏見人形を源流とする土人形の産地は，幕末のころ全国に一〇〇以上を数えるほど普及した．その他各藩の生活文化の中心となったそれぞれの城下町やその周辺には，郷土色を帯びた地方人形玩具類が自給自足的に作られて愛玩された」（p.24）と述べている．

5.4　今戸の招き猫

このように人形の一大産地であった伏見に対して，今戸はどのように位置づけられるだろうか．今戸人形について，『日本人形玩具辞典（斎藤1997）』には次のように記載されている．

> 江戸時代初期，江戸の町作りに必要な瓦焼きの傍ら生まれたもので，京の伏見人形の影響を受けながら独自の持ち味を生かして発逮．群青と朱丹を主調とした彩色で小型物を主とし，安価で酒脱な江戸っ子好みの点が愛されて広く親しまれた．一説には，天正年間（1573-92）家門断絶した旧城主江戸氏の遺臣たちが今戸に土着．この一帯の良質の粘土を利用して瓦並びに土器製作を生業としたのが始まりともいう．元禄六年（1693）刊の『西鶴置土産』（井原西鶴）に，「ある時浅草の寺町の横筋を行くに内の見えすく芦簾住みあれたる宿の棚に濃紫姿屋の看板出して土人形の細工する男を

見れば，京にて立役勤めし嵐三郎四郎が白無垢の上に破紙子身をやつし芸に出しよりは尚憎からず，いかさま子細者奴と立寄り，御亭主此人形は濃紫ならばまづ遊女にしては帯が狭まし，殊に，後のとりなりまんざらの人のおかためきた事といへば，いる気なれば取りてござれ，一文に一つづつ売るものを無理なる御吟味それは七十四文に売る時の詮議と笑ひける」とあり，元禄年間にはすでに今戸人形の存在していたことが分る．鐚銭一文の安物で．「一文人形」とも呼ばれた．享保（1716-36）以降瓦並びに土器類生産の増大にともない土人形の製作も上昇．天明（1781-9）ころの川柳に「西行と五重の塔をほしかため」（『柳多留』一九篇）とあるが，「西行」は京都の伏見人形を模したものであり，伏見人形の影響も受けて発達したことが示されている．(p.29)

すなわち，江戸期に入って，それまで土器産業の中心であった伏見から，全国各地への技術移転が起きた．当然江戸にも土器技術が導入され，そのセンターの一つが今戸だったといえる．土器技術は，人形というより，都市建設に必要な瓦の生産，生活雑器などが主流で，その傍ら人形生産も行われたのだろう．

都市化が進み，文化文政のころになると，子供用の玩具人形も増えてきた．斎藤によれば，「従来の「振れ売り」式の行商のほかに，常時これらを売る固定した「常店」がふえてきた」(p.25)．その例として，「弘化三年（一八四六年）の稿本『江戸沿革』（著者未詳）には江戸浅草観音境内，二十間の玩具店の模様を記して，そこで売られているものに，「今戸焼の土の姉さま，田楽焼のおたふく，ひたい紙のうかれ男，猫と鼠，米掲き猿，首ふり虎，糸つるべ井戸，覗きからくり，筒舟に車，針箱，箪笥，かまど，まな板，笠に烏帽子に鳶口，まとい，庖（つと）に並ぶ人形，神楽面，獅子に太鼓に三味線，鼓，天神，達磨」などをあげている」．そして，「このうち今戸焼きの土人形は，問屋を通じて江戸各町内の番太小屋などで販売された」という．さらに斎藤は次のように述べている．

図16　豊国,国久「江戸名所百人美女　今戸」
安政4年（1858年）（国会図書館蔵）

図17　江戸の花名勝会　り　十番組」
松本幸四郎／今戸の朝烟／今戸
豊国，惺々狂斎，椿月　文久3（1863）年
（国会図書館蔵）

図18　清水清風『うなゐの友』に描かれた招き猫玩具たち（国立国会図書館蔵）

以後幕末にかけてはその全盛期を迎えて今戸人形独特の題材を生かしたものが数多く生まれ，文化（1804-18）ころの川柳に，「村の嫁今戸のでくで雛まつり」今柳多留』二一篇）とあるように江戸近郊にも販路が拡張されて大衆的な支持を得た．値段も子ども相手を主とした一文人形の他，小ま

じり（小形もの）が四文で，さらに中まじり（中形もの），大形とあったが，天保から安政（1855-60）年間には業者も三，四〇人を数え，その種類も一〇〇を越えた．」[36] (p.29)

このような流れの中で，「丸〆猫」も生まれ，古くからの風説構造に基づくストーリーを付与することによって，「流行神」的な売上げを見せたのかもしれない．

ちなみに，玩具研究家の清水清風が明治初期に全国各地のおもちゃを描いた『うなゐの友』からは，すでに日本各地で多種多様な「招き猫」が生産されていたことがわかる（図18）．昭和初期に出版された『江戸の今昔』に掲載されている今戸の招き猫は，丸〆猫とは異なっている．

5.5　招き猫流行と養蚕業の発展

この時期，「招き猫」が一気に流行した背景には，遠藤（2017）で論じた養蚕業の興隆も忘れてはならない．

江戸中期，我が国養蚕技術は新たな段階に入り，農村部に富をもたらす産業へと発展していった．

開国，開港し，外国との貿易が始まると，養蚕・製糸業の重要性はさらに高まった．生糸・絹織物は輸出の中心となったのである．『横浜市史稿』（1931-33）によれば，横浜における安政六年から慶応三年までの間の生糸の総輸出額は，2284万2700両に達した（p.86）．

各地で養蚕が奨励され，蚕神（鼠よけ）としての猫への関心も高まった．

36）この辞典には，続けて，明治以降の今戸人形について次のように記載されている．「明治に入って生産を中止，同七，八年ころ一時復活したが，新興玩具に圧倒されて同一三年（六台）ころには全く廃絶した．大正一二年の大震災後発堀された人形の型を基に再び製作が行なわれ，戦前までは四，五軒の業者が見られたが，戦後，郷土玩具としての今戸人形は全く姿を消し，今戸焼きを名乗る業者が一軒だけ蚊いぶし，招き猫などを作っている．今戸人形の種類には前記の他，月経不順の時のまじないに用いられた月見兎，付近の吉原九郎助稲荷のお使い狐とされた羽織狐，花柳界に求められた縁起物の太鼓打ちなど，江戸末期の生活習俗を知るうえに資料となるものが多い」．

37）郷土玩具研究家，嘉永4年（1851年）- 大正2年（1913年）

信州上田では安政6年(1859)に蚕神を信心すべき令が出されたと記録されている(上田・宮下日記). 現在も残る各地の「猫塚」の多くはこの時期のものである.（ただし，喜多村（1830）は，備前・備後の「猫神」について「狐神のごとし」と述べ, 信州, 上州や秩父の「くだ」との関連に言及している).

こうした猫神信仰が江戸へ伝わって都市的流行神としての「招き猫」がもてはやされたとも考えることができる.

5.6　神狐と招き猫の違い

先にも述べたように,「招き猫」は神狐から派生した流行神像と想定できる.

ただし，招き猫においては，その「神」性は著しく薄まっている．先に，表２として，狐と猫の類似性を挙げた．しかし，狐から猫への変化は，類似性に基づく単なる代替ではなく，社会全体の世俗化にともなう質的な変化の表徴でもあったのである．神狐と招き猫の相違点を表３に示す.

表３　神狐と招き猫の相違点

神狐	招き猫
土着神⇒外来の仏教・陰陽道・神道と習合⇒神秘化	外来動物 禅宗とのつながり⇒大衆化
葛の葉伝説	猫又伝説
農村部において人びとと深いつながりをもった野生動物	江戸期，都市部で人びとと深いつながりをもつようになった愛玩動物
農業神，養蚕神	養蚕神⇐養蚕振興
江戸期，流行神	江戸の風説⇒瓦版，戯作，浮世絵などの新メディアによる拡散⇒流行化
屋敷神の公開	化け猫騒動，猫塚
街角ごとの稲荷	家ごとの招き猫
交通の発達⇒講による参詣の普及⇒みやげ物文化の発達	「子どもの誕生」⇒玩具産業

6．化け猫たちの跳梁

6.1　襲いかかる化け猫たち

ここまでは人間にとって恩恵をもたらす「招き猫」を中心にみてきた．

しかし，江戸期に人びとの話題に上ったのは，人間に恩返しする「招き猫」の噂ばかりではなかった．人間に復讐する恐ろしい化け猫たちの物語もまた，大いに人気を博したのである．

なかでも，有馬の猫騒動，鍋島猫騒動，岡崎の猫騒動は，「三大猫騒動」として講談や歌舞伎を通して語られた．いや，むしろ，講談や歌舞伎を通じて創り出された，というべきだろう．これらの物語については，当時の人びとでさえ，それが「事実」であるとはまったく思っていなかったようである．

もっとも，「猫」は，鼠を獲る益獣，愛らしいペット，恩返ししてくれる福の神というだけでなく，中世以来[38]，恐ろしい妖魔としても語られてきた．

鎌倉時代の歌人である藤原定家が治承4年（1180年）から嘉禎元年（1235年）まで書き続けた日記である『明月記』の天福元年（1233年）8月2日の記事には，「南都[39]に猫胯という獣が現れて，一夜にして7，8人の死者が出た．この獣を打ち殺すと，目は猫のようであり，身体は犬のように大きかった」との記述がある[40]．

また同時代に伊賀守橘成季が編纂した説話集である『古今著聞集』[41]には，猫に関して次のような記事が掲載されている．

①保延[42]のころ，宰相中将だった人の乳母が猫を飼っていた．その猫は高さが1尺もあり，力が強くて綱を切ってしまうので，つながずに放し飼

38）平安期の説話集には「猫」は登場しない．

39）奈良

40）ただし，この記事が「猫胯」という怪獣のことを述べているのか，猫胯廟というような病気のことを述べているのかについては，諸説がある．また，『徒然草』（1330年頃，兼好法師）にも「猫又」の話が出てくるが，これは怪猫の話ではない．（遠藤（2017）等参照）．

41）20巻30篇726話からなる．建長六年（1254）10月頃に一旦成立し，後年増補．

42）1135 ～ 1141年

いにしていた．10歳をこえるころ，夜になると背中が光った．乳母はいつもこの猫に，「おまえが死ぬとき，私にその姿を見せてはいけない」と言い聞かせていた．理由はよくわからない．猫は17歳になったとき，行方知れずになった．（巻20）

②高貴な人がしろねという猫を飼っていた．その猫は，鼠や雀を捕りはするが，あえて食べず，人の前で放すのだった．不思議な猫である．（巻20）

これらは中国の猫鬼の話が伝わったものともされる．

一方，遠藤は中世以降の猫又風説の発生について，稀少だった飼い猫の野生化という可能性を示唆した（遠藤（2017））が，実際，現代でも，飼い猫が離島などで野生化して固有種を絶滅に追いやる危険も発生している[43]．江戸期にも害獣化した猫が現実に人びとを脅かしたこともあっただろう．

6.2　江戸期における怪猫の説話

江戸期の説話集には，猫の妖魔も頻繁に登場する．

例えば，表４に示すような風説が記録されている．猫が年を経ると，人に取り憑いたり，言葉を話したり，立って踊ったりするという話が多い．また，山中で恐ろしい猫に出会うという話も多く書きとどめられている．

43）小笠原猫プロジェクト（https://www.ogasawaraneko.jp/ogasawaranekoproject/）など．

表4　猫の妖力に関する風説

年	収録	内容
	耳嚢（二の巻）	「猫の人に化けし事」
	耳嚢（二の巻）	「猫人に付きし事」
	耳嚢（二の巻）	「仏神に猫を禁じ給ふといふこと」
	耳嚢（四の巻）	「耳中へ蚣入りし奇法の事」
寛政7（1791）	耳嚢（四の巻）	「猫物を言ふ事」
	耳嚢（巻七）	「古猫奇ある事」
文化11（1814）	耳嚢（巻九）	「猫の怪の事」
近頃	耳嚢（巻九）	「古猫に被害し事」
文化11（1814）	耳嚢（巻九）	「猫の怪談の事」
安永・天明の頃（1772-89）	耳嚢（巻十）	「猫忠死の事」
天保（1831-45）	甲子夜話（三編五）	「猫酒家」p.281
	甲子夜話（二編二十二）	上州太田で山猫に追われ，これを撃ち止める.（谷文晁の話）
	甲子夜話（二編二十三）	奥州の猫には紫の色のものがある．養蚕が盛んなので，馬が一両のところ，猫は五両もする.（谷文晁の話）
	甲子夜話（二編二十三）	平戸安満岳の山上には忌みごとが多い．猫が山に入る事も禁止されている.
	甲子夜話（二編九）	猫の捉え方
嘉永2	武江年表	是の月（6月），牛込横寺町長五郎店清吉妻きんの連れ子まつ十一歳，食物振舞ひ猫に異ならずとの噂あり．見物に行く者多し.

6.3　歌舞伎の中の猫

こうした多様な猫伝承は，集成され，組み替えられて，江戸の演劇として花開いた．

浄瑠璃では，先にも挙げた水木辰之助の所作や，「下関猫魔達」[44] が有名である．ただし，これらは，『源氏物語』の三の宮のエピソードを下敷きにした，アンコントロールな恋を表現するもので，「化猫」とはいえない．

猫が歌舞伎に登場する例としては，『東海道四谷怪談』[45] のなかで，伊右衛門に無慙に裏切られたお岩が，恐ろしい姿に変貌していく場面に現れる猫が衝撃的である．しかしここでの猫は象徴的ではあるがまだ主役ではない．

いまに続く「化猫」イメージを確立したのは，『東海道四谷怪談』で大当たりをとった四世鶴屋南北が書いた『獨道中五十三驛』[46] である．南北は，死の２年前の73歳で（文政十年（1828））この作品を書き下ろした．初演は江戸・河原崎座で，三世坂東三津五郎が主演した．

渥美清太郎[47] は，『歌舞伎脚本傑作集』．第6巻（坪内逍遙・渥美清太郎編，春陽堂，1922年）の解題で，この奇想天外な芝居に「観客は驚喜して喝采したのでした．此芝居が，炎暑の最中にもかかはらず，当時の記録を破る大入りを占めた」（p.2）と記している．

また渥美によれば，「此狂言は大成功を占めたので，後年度々上演され」（同上，p.4），以下の演目が次々と上演された．

１．『初春五十三駅（うめのはつはるごじゅうさんつぎ）』

天保六年（1835）二月，市村座で上演．名題を「初春五十三駅」と改め，四代目中村重助，三升屋二三治，五代目鶴屋南北が補作．

２．『尾上梅寿一代噺（おのえきくごろういちだいばなし）』

44）表＊参照

45）四世鶴屋南北作の歌舞伎狂言．全5幕．文政8年（1825年），江戸中村座で初演．

46）『東海道四谷怪談』と『獨道中五十三驛』は，猫が恐怖の象徴として使われている点，東海道／五十三次がモチーフとされている点など，共通項が仕込まれていると考えられる．

47）1892－1959　大正-昭和時代の演劇評論家．

弘化四年（1847）七月，市村座で上演．尾上菊五郎（三世）の引退興行．三代目桜田治助，三代目並木五瓶，清水正七，松島陽助，梅沢宗二等が改作．

３．『吾嬬下五十三駅（あづまくだりごじゅうさんつぎ）』

安政八年（1854）八月，河原座上演．二代目河竹新七（黙阿弥）作．四代目市川小団次主演．

４．『花摘籠五十三駅（はながたみごじゅうさんつぎ）』

万延元年（1860）五月守田座上演．三代目桜田治助補作．

５．『東駅いろは日記（とうかいどういろはにっき）』

文久元年（1861）七月市村座上演．二代目河竹新七（黙阿弥）作．

６．『千歳鶴東入双六（ちとせのつるえどいりすごろく）』

明治元年（1868）二月中村座上演．三代目瀬川如皐作．

７．『東海奇談音兒館（とうかいきだんのこまたやしき）』

明治四年(1871)九月中村座上演．三代目瀬川如皐作．五代目尾上菊五郎主演．

８．『五十三駅扇宿附（ごじゅうさんつぎおおぎのしゅくづけ）』

明治二十年（1887）七月中村座上演．二代目河竹新七（黙阿弥）作．五代目尾上菊五郎主演．

いかにこの芝居が江戸市民から大人気を博したかがわかるだろう．

ちなみに，この作品は，昭和五六年（1981）に市川猿之助によって復活された．その後，市川右近（現・猿之助）によって，スーパー歌舞伎の演目として近年繰り返し再演されている．

またこの作品の当時の人気を示すものとして，絵双六への登場も挙げられる．近世においては，「絵双六」が子どもたちの娯楽のためのものから，その時期の人気を集約して楽しむものとしても展開し，優れた浮世絵師たちが腕をふるった．現在ではその一部しか残っていないが，「百種怪談妖物双六」（図19）では，怪猫が3コマも占めており，とくに「上がり」は，「岡崎の猫」を表している．同じく「宙乗寿語六」は，歌舞伎の宙乗りの人気場面を集めたものだが，ここでも，「上がり」は，「岡崎の猫」となっている．

図19 「百種怪談妖物双六」画・一寿斎芳員 出版・和泉屋市兵衛 安政５（国立国会図書館蔵）

一連の『獨道中五十三驛』ものに続いて，『花埜嵯峨猫魔稿』が嘉永6年9月に中村座で初演の運びとなるが，鍋島家からの苦情により上演中止となった．この物語が，鍋島家とその主家竜造寺家の因縁に関わる風説を下敷きにしたためといわれている．その後，講談「佐賀の夜桜」，実録本「佐賀怪猫伝」などが人気を呼び，歌舞伎としては，『百猫伝手綱染分』が元治元年（1864）8月28日に江戸中村座で開演した．

さらに河竹黙阿弥[49]は，明治13年（1880）に「有馬の猫騒動」を描いた『有松染相撲浴衣』（猿若座），）同じく明治13年『嵯峨奥妙猫奇談』（竹柴金作の

48）歌川 芳員（生没年不詳）は，江戸時代末期から明治時代初期にかけての浮世絵師．歌川国芳の門人．作画期は嘉永頃から明治3年（1870年）頃にかけて．

49）江戸・日本橋の裕福な商家に生まれたが，天保6年（1835年）に五代目鶴屋南北の門下となる．嘉永7年（1853年）に小團次のために書いた『都鳥廓白波』（忍の惣太）が大当たりをとり，『三人吉三廓初買』（三人吉三）や『小袖曾我薊色縫』（＝『花街模様薊色縫』，十六夜清心），『処女翫浮名横櫛』（切られお富），『青砥稿花紅彩画』（白浪五人男）などを書き，人気作家となった．明治維新後も活躍し，坪内逍遙にも絶賛された．

表4　猫が重要なキャラクターとして登場する浄瑠璃・歌舞伎作品

作品	初演， 作者など	あらすじ	原話（？）
四季御所桜（『今源氏六十帖』）	元禄八年正月京都早雲座	所作事．水木辰之助の猫の所作が評判に．	源氏物語？
下関猫魔達（浄瑠璃）	近松門左衛門（添削）二条通寺町西へ入町（京都）：山本九兵衛，［出版年不明］	病養生のため瑠璃ケ崎の薬師を訪れた治部太夫義照の娘・照姫は，恋人との再会を祈願するため，自らの干支に因んだ虎の絵馬を薬師堂に奉納したいと願う．そんな姫に大弐という若者が恋をする．困った姫は，絵馬を薬師堂に奉納する大願が叶うなら大弐の思いにこたえるという．姫の言葉を信じた大弐は，早く絵馬が完成するようにと，虎に似た猫の妻恋いの所作をする．	源氏物語？
今川本領猫魔館（いまがわほんりようねこまたやかた）（人形浄瑠璃）	1740年（元文5）4月大坂竹本座初演，文耕堂，千前軒，三好松洛ら合作	今川家のお家騒動．怪猫が重要な役割を担う．	
独道中五十三駅（ひとりたびごじゅうさんつぎ）」池鯉鮒八シ橋村の場岡崎無量寺の場	1827年（文政10）6月江戸河原崎座，4世鶴屋南北作	丹波の国由留木家には二人の男子がいたが，長男大学は不義の子で，主君は次男調之助に家督を譲ろうとし，お家騒動となる． 佐内の家臣由井民部之助が池鯉鮒八ツ橋村を夜半に通りかかると，一軒の家の屋根の上で猫が踊っている．一夜の宿を頼むと，出てきた姉妹はかつて契りを結んだお袖・お松の姉妹だった．姉妹の母お三ももと由留木家に仕えていた．お三にとり憑いた猫がいろいろと変事を起こす．身籠ったお袖と民部之助は旅に出，途中で子どもが生まれる．二人は岡崎の無量寺に泊まるが，そこには死んだはずのお三がいる．寺の女中おくらがお三の飼い猫が物の怪ではないかと疑い，お三はおくらを喰い殺す．お袖はそれを見てしまい，化猫に子どもとともにとも殺される．御簾を切って落とすと大猫が現われ大立廻りとなる．寺の裏手の猫石が割れ，十二単衣の猫の精が，由留木家を恨みに思うと叫び宙空へ飛び去っていく．	「岡崎城の怪物」（『藤岡屋日記』）？ ※スピンオフ作品として，「初春五十三駅」（1835，市村座）「尾上梅寿一代噺」（1847）などがある．

花埜嵯峨猫魔稿（はなのさがねこまたぞうし）」直島館碁打の場大魔ヶ嶽猫塚の場直島家奥館の場 百猫伝手綱染分（1864（元治01））江戸中村座		高山検校は直島家のゆかりの家柄で，碁の名人だった．主君と碁打の勝敗によって二人の子息のどちらかに跡目を決める．主君は弟君を跡継と考えているが，弟君は不義の子だった．兄君の方にかけている検校は，術策にはまり勝負に負け，なぶり殺しにされ土蔵の壁土の中に塗りこめられる． 一方，大魔ヶ嶽の自然石の猫石の前に呪咀の戒壇がつくられ，嵯峨の方は，主君と兄君を殺そうと参籠している．生贄に検校の猫を殺してその生血を猫石に注ぐと，泰山鳴動，猫石は割れて陰火は虚空に飛び去り，猫の精は嵯峨の方に乗り移って，さまざまな怪事が起こる．兄君の忠臣は猫の精の正体を見破り，猫の怪と激闘する．	《肥前佐賀二尾実記》（発行年不明）や《嵯峨奥猫魔草紙（さがのおくねこまたぞうし）》（1854）
有松染相撲浴衣（ありまつぞめすもうのゆかた）	1880年5月東京猿若座初演，河竹黙阿弥作	有馬家の側室お志賀の方は，殿の寵愛をお巻の方に奪われたため，お巻の方を苛め，自殺に追い込む．お巻の方の召使いお仲は，主人の恨みを晴らそうとするが，主人の愛猫が老女達に飛びかかったので殺される．お仲に猫の精が乗り移り仇を喰い殺して姿を消すが，妖怪は奥庭に現われ続ける． 有馬家お抱えの相撲力士小野川は，出入りがかなわなくなっていたが，妖怪を退治し，お仲を諭すと，お仲も自害する．	相撲力士小野川のエピソード ↓ 「有馬の猫騒動」
櫓太鼓鳴音吉原（やぐらだいこおともよしはら）江州四明ヶ嶽の場三浦屋薄雲部屋の場	不明	吉原の傾城薄雲太夫は，鼠の精の深見十三と深い仲となる．薄雲の愛猫は十三を主人に近づけまいと，新造胡蝶に乗り移り，深見を口説く．廓の掟に背いた新造が折檻を受けていると，猫が現れ，胡蝶の縄を喰い切って，胡蝶とともに十三の鼠の精と闘う．	薄雲太夫と猫の説話

作で黙阿弥は助作，市村座）明治20年（1887）『五十三駅扇宿付』（四世鶴屋南北作『独道中五十三次』（文政十年（1827），河原崎座）の改作）などを書き，大人気を博した．

6.4　化け猫と「猫じゃ猫じゃ」

江戸期から明治にかけて「猫じゃ猫じゃ」という歌が大流行した．夏目漱石の『吾輩は猫である』にも,「猫」が連載となった初めの話と,最終章で「猫」が死ぬ場面に，この歌のことが出てくる．それだけ多くの人に知られた俗謡だったのだろう．

大正四年（1912）に発行された『俚謡集拾遺』[50] には，明治五年（1872）頃流行した歌として,次のような「猫じゃ猫じゃ」[51] が掲載されている（「付録　明治年間流行唄」P.10）．

○猫ぢゃ猫ぢゃとおしやますが，猫が，猫が下駄はいて傘さして絞り浴衣で来るものか，オツチヨコチヨイノチヨイ．

○下戸だ下戸だと言はんすが，下戸が一升樽かついで，前後も知らずに酔ふものか，オツチヨコチヨイノチヨイ．

これらの例からもわかるように,「猫じゃ猫じゃ」あるいは当時の流行唄は一般に，構造や合いの手などによってアイデンティファイされるが，はめ込まれる言葉は自由自在に返られる．

他によく知られた「猫じゃ猫じゃ」には，次のようなものがある．

○猫ぢゃ猫ぢゃとおしやますが，ねこが十二単衣をきるといな，ごろにゃん[52]．

○猫ぢゃ猫ぢゃとおしやますが，猫が，猫が下駄はいて，杖ついて，絞りの浴衣で来るものか[53]．

この「杖ついて」のバージョンは，木村荘八の『註釈　小唄控』に収録されているものだが,「五代目菊五郎「鍋島猫騒動」興行の時のはやり唄，調刺もここまで来ると誠に軽妙である」との注釈がついている．一方，同書の巻末の「年表」には，天明（1781年～1789年）の流行唄として「猫じゃ猫じゃと」が挙げられている．これに対して，先に注にも書いたように『俚謡

50）高野斑山・大竹紫葉（編），1915,『俚謡集拾遺』六合館
51）元歌は文政11年（1828年）に流行した「蝶々蜻蛉」であるとの注釈がある．
52）豊島与志雄，1933、「立枯れ」『改造』1933年7月号
53）木村荘八，1961,『註釈　小唄控』文雅堂書店，p.208

集拾遺』では，文政11年（1828年）に「蝶々蜻蛉」が流行ったとある．中野（1993）は「この唄が流行したのは寛政十二年（1800）だった」（p.255）と書いている．

このような「猫じゃ」の流行年代の混乱について，小林（2008）は，「「猫じゃ猫じゃ」は，歌舞伎の『獨道中五十三驛』の流行の影響による1800 年前後を中心とした時期と，その後，五代目菊五郎の「鍋島猫騒動」興行に並行して流行ったものと説明される維新前期から明治六年頃までの流行という，「猫騒動物」の流行と併存して，大概して二度にわたり流行した歌といえる」（p.235）と結論づけている．

確かに「ねこが十二単衣をきるといな」といった歌詞は，『獨道中五十三驛』の場面を下敷きにしているとしか考えられないし，「猫騒動物」の絵には頻繁に「踊る猫」の図が出てくるので，「猫騒動物」に刺激されてこの唄が反復的に流行したとも考えられるし，あるいは，「猫騒動物」の上演側が，上演プロモーションの一環としてこの唄の流行を促したとも考えられる．

いずれにせよ，「猫騒動物」は，読本，講釈，芝居，小唄などメディア重層的な流行空間を長い期間にわたって反復的に構成したといえるだろう．

6.5　化け猫騒動の物語構造ー化け猫と招き猫

ただし，これらの化猫騒動もの（あるいは歌舞伎一般がそうでもあるが）は，高い人気を挙げたとはいうものの，登場人物たちの関係が複雑で，筋が込み入っており非常にわかりにくい．それは，藤澤（1928）や横山（2000）も指摘するように，「怪猫劇の構成は，民間發達の怪猫傳説に筋をとるところに一つの形式が認められるが，それよりも，その劇としての特長は，文化妖怪劇の傳統である，文政怪猫劇の早替り的活躍が凄味中心に傾向したところにあって．劇としての發達は，その租源に於けるものの型の踏襲の上に終始され，観物も其虚に喝采を続けて来た態にあ（藤澤1928：45）」り，「江戸時代の人々の日常生活の中で現実に起こり得る不可思議な出来事を集め，作品化してこそ，劇場に足を運ぶ見物をおびやかすことができる．見物に舞台の上の怪異現象をあり得べき事柄として受けとめさせること，見物に怪異のリァ

リティを感じさせることこそ，見物をおびやかし恐怖感を与える怪談狂言の目的であると言える（横山：139）」かもしれない．

しかし，それだけだろうか．われわれは人びとが感じる「リアリティ」というものについて，より深く考える必要がある．たしかに，これらの「化猫話」には共通の構造がある．

ここでは例として有馬の猫騒動について見てみよう．

久留米藩の九代頼貴の夫人には，お里から附いて来た奥方附き女中がいた．あるとき酒宴の最中に，猫を追い掛けて一匹の犬が暴れ込んだ．猫は殿の後に隠れ，猛り狂った犬が殿様に噛みつこうとしたので，女中は手早く犬を打殺した．女中は褒美に猫を拝領し，殿に寵愛されるようになった．嫉妬深い奥女中たちからのいじめにより，彼女は遂に自殺した．その召使いは奥女中に仇討ちしようとしたが，返り打ちになろうとした時に，あの猫が飛び出して来て老女の咽喉を噛み切った．猫は続いて一人の足軽を火の見へ引き上げて喰い殺し，さらに関係する者たちを殺した．その頃久留米の抱え相撲小野川喜三郎は，殿へのおわびに，典膳と協力して，潜伏して居る火の見で怪猫退治を仕遂げた．（「猫騒動の梗概」，三田村鳶魚『江戸雑話』p.414-416より遠藤が要約）

この物語を先に挙げた「薄雲太夫」の物語やその他の猫の物語と比較したのが表５である．こうしてみると，猫騒動物と猫の報恩と招き猫説話が，いずれも同じ構造であることがわかるだろう．

そして，この同型性は，単に「馴染み」という意味でのリアリティを感じさせるために採用されたというよりも，それが世界にかなり普遍的に分布している始原（創生）神話の基本構造であることに由来していると考えられるのである．この点について，遠藤（2015）でも簡単に述べているが，詳しくは別稿に譲る．

表５　化け猫物語と招き猫説話の構造

	有馬の猫騒動	花川戸の猫	回向院の猫塚	豪徳寺の招き猫	薄雲太夫
主人公	美しい女中	貧しい老婆	貧しい魚屋	貧しい住職	美しい太夫
猫と主人公	女中は猫を飼い，可愛がる．女中は殿の寵愛を受ける	老婆は猫を可愛がる	魚屋は得意先の猫を可愛がる	住職は猫を大事に飼う	薄雲は猫と異常なほど親密な関係となる
娘／猫への迫害	嫉妬深い奥女中たちが女中を自殺に追い込む	猫が近所の小鳥を殺したため，老婆は猫を捨てる	猫は主家の金を盗んだ罪で殺される	寺が衰退し，住職は猫を飼えなくなる	主人が薄雲と猫の関係を怪しみ，猫を殺す
結果	猫が女中の仇討ちをする	猫は罪を悔いて自殺し，老婆に招き猫を売ることを勧める	魚屋の困窮を見かね猫が魚屋に金をくわえてくる．	猫が井伊家の当主を寺に招き入れる	猫が薄雲を護ろうとしていたことが判明
後日談	相撲取りが怪猫退治	招き猫が大人気となり老婆は栄えた	主家は回向院に猫塚を建てる	寺は井伊家の菩提寺となり，栄えた	猫が遊女のシンボルに

6.6　人間が猫に化けたのか，猫が人間に化けたのか

表層的で非合理，一時的な流行と見なされがちな「猫の物語」は，始原（創生）神話の再想起という性格を隠し持っている．始原（創生）神話とは，その共同体の起源を説明する神話である．とはいっても，それは厳めしく，秘められたものではない．それは新年を迎える行事や年ごとの祭にも表現されている．

しかし，そもそも「猫」とは何ものなのだろうか？国芳はなぜあれほど猫の絵を描いたのだろうか？確かに国芳が猫好きであったことはよく知られている．だがだからといって猫ばかり描く理由にはならないだろう．

国芳が世に知られるようになったのは，歴史や伝説に材をとったダイナミックな作品であった．たとえば，「相馬の古内裏」（図20）は，山東京伝の『善知鳥安方忠義伝（うとうやすかたちゅうぎでん）』（文化３年（1806））のなかの，平将門の遺児である滝夜叉姫（たきやしゃひめ）が呼び出した骸骨の妖怪が大宅太郎光国（おおやたろうみつくに）に襲い掛かる場面を描いたものであ

る．巨大な骸骨を前面に配した大胆な構図，西洋の解剖図から学んだのではないかとされるリアルな骸骨描写などにより高く評価される作品である．

しかし，こうした作品の中には，幕府を批判したものとして評判になったものも多い．例えば，「源頼光公舘土蜘作妖怪圖」（図21）は，「病床の源頼光とその 四天王の背後で土蜘蛛が巣を広げ，様々な妖怪が徒党を組んで争う様が描かれた大判三枚続の錦絵である．四天王の卜部季武の装束に施された沢瀉紋が水野忠邦（1794 ～ 1851）の家紋に類することから，本作は忠邦

図20　相馬の古内裏（国芳，1844-48頃）

図21　源頼光公舘土蜘作妖怪圖，一勇斎國芳・画，伊場屋仙三郎・出版，天保14（1843）（国立国会図書館蔵）

の天保の改革を風刺したものとの憶測が広まり，「判じ絵」として 江戸中の評判を呼んだ」（曽田2013）．当時は，天保の改革の時期に当たり，版元はこの絵を自主回収することとなった．（○で囲んだ部分は猫である）．

販売を禁じられたのは，風刺画（と見なされた絵）だけでなく，美しい役者絵や遊女の錦絵も対象となった．これに対して国芳は，「荷宝蔵壁のむだ書」（図22）のように悪戯がきのようにデフォルメしたり，「里すずめねぐらの仮宿」（図23）のように，動物を擬人化して描く手法を用いた．これは，必ずしも「反骨」というだけではなく，窮余の策でもあったろうし，またむしろそこに新たな表現の面白さを見いだしたということもあっただろう．

図22　荷宝蔵壁のむだ書
（国芳，国会図書館蔵）

図23 「里すずめねぐらの仮宿」
（国芳，1846，国会図書館蔵）

そして，人間に替わって国芳の絵で以前にも増して活躍するようになるのが，「猫」であった．「流行猫の戯」（国芳，1847）は，役者絵を，役者の面影を残しつつ猫の顔に替え，「おぼろ月猫の盛」（国芳，1846）では「里すずめねぐらの仮宿」と似た構図で猫になっている．大衆文化の台頭とそれを抑えようとする幕政によって，浮世絵師や戯作者たちが幕政を批判しようとしたか否かとは別に，作品の中の人間たちは人間であることを許されなくなった．こうして，人間は猫になったのかもしれない．

6.7　猫絵の社会背景

創作者である国芳らと同時代の文化人たちが何を意図して大量の猫絵を世に送り出したのかはよくわからない．招き猫や化け猫劇も，具体的に個別の作品を創りだした者たちが何を考えていたのかはわかりようもない．おそらくは，前節で国芳について考えたようなアドホックな動機が複数重なったの

表６　幕末から明治への主な事件

年	事項
寛政３年（1791）	山東京伝，筆禍に遭う
文化元年（1804）	ロシア使節ニコライ・レザノフが通商を求め長崎へ来航
文化元年（1804）	四世鶴屋南北「天竺徳兵衛韓噺」初演（河原崎座） 藤岡屋由蔵[49]『藤岡屋日記』開始（1804-1868）
文化三年（1806）	文化の大火（江戸三大大火の一つ），死者 1200 人以上.
文化四年（1807）	江戸深川の永代橋が崩落し，死者・行方不明者 1400 人以上. 「猫死すること夥し」（武江年表） 「光り物飛ぶ．大きさ鞠の如く青みあり」（武江年表）
文化五年（1808）	フェートン号事件
文化八年（1811）	ゴローニン事件
文政四年（1821 年）	松浦静山『甲子夜話』書き始める（～ 1841）
文政八年（1825）	異国船打払令，12 月 信濃国で赤蓑騒動. 四世鶴屋南北「東海道四谷怪談」初演
文政十年（1827 年）	四世鶴屋南北「獨道中五十三驛」初演
文政十一年（1828）	シーボルト事件，シーボルト台風（九州地方北部を中心に死者 19 千人以上）
文政十三年（1830）	夏～秋：阿波を中心にお蔭参り大流行．京都亀岡付近を震源とするマグニチュード 6.5 ± 0.2 の地震，文政の大火
天保七年（1836）	天保の大飢饉，天保騒動（甲州騒動）
天保八年（1837）	大塩平八郎の乱，生田万の乱，モリソン号事件
天保十年（1839）	蛮社の獄
弘化四年（1847）	善光寺地震 M7.4
弘化五年（1848）	青山火事
嘉永元年（1848）	1848 年からフランスやドイツなどヨーロッパ各地で起こり，ウィーン体制の崩壊を招いた革命.
嘉永三年（1850）	斎藤月岑『武江年表』正編刊行（続編は明治 15 年刊行）
嘉永五年（1852）	浅草で「丸〆猫」大人気

嘉永六年（1853）	小田原地震，浦賀にペリー来航，ロシア大使プチャーチン，長崎に来航 瀬川如皐「花野嵯峨猫魔稿」初演⇒中止
嘉永七年（1854）／安政元年	3月　日米和親条約，4月　京都大火，6月（7月）　安政伊賀地震，11月（12月）安政東海地震・安政南海地震・豊予海峡地震，12月（1855年2月）日露和親条約
安政二年（1855）	2月（3月）飛騨地震，10月（11月）安政江戸地震死者4500-2万6000
安政三年（1856）	7月（8月）安政八戸沖地震，8月（9月）台風被害により江戸で死者10万人
安政五年（1858）	2月（4月）飛越地震，9月（10月）安政の大獄，～安政7年にかけてコレラ大流行.
安政7年／万延元年（1860年）	3月　桜田門外の変
文久二年（1862）	2月皇女和宮降嫁，8月生麦事件
文久三年（1863）	7月薩英戦争，8月天誅組の編，9月井土ヶ谷事件，10月生野の変
元治元年（1864-1865）	3月水戸天狗党挙兵，6月（1864年7月）池田屋事件，7月（8月）禁門の変，8月（9月）四国連合艦隊下関砲撃事件
慶応二年（1866）	五稜郭完成
慶応三年（1867）	ええじゃないか発生 10月大政奉還，12月王政復古の大号令
慶応四年（1868）	1月戊辰戦争，5月北越戦争
明治元年（1868）	明治維新，神仏分離令，長野・栃木などの諸県で農民騒擾
明治二年（1869）	東京奠都．戊辰戦争の終結，五稜郭の戦い．版籍奉還
明治四年（1871）	廃藩置県　戸籍法
明治五年（1872）	学制　グレゴリオ暦採用
明治六年（1873）	徴兵令．地租改正．征韓論
明治七年（1874）	民選議院設立建白書．佐賀の乱．台湾出兵．地租改正反対などの農民騒擾約21件
明治八年（1875）	平民の称姓布告．福岡・島根などで農民騒条約15件.
明治九年（1876）	神風連の乱・秋月の乱・萩の乱・思案橋事件．茨城県農民一揆・伊勢暴動（三重県農民一揆），愛知県・岐阜県・堺県下へも波及．鳥取・長野などの諸府県で主に地租・地価改定を巡り農民騒動約26件.
明治十年（1877）	西南戦争始まる．2月熊本県民3000人暴動．8月コレラ，長崎・横浜に発生（～10，全国に流行）．熊本をはじめ諸県で農民騒動役47件.
明治十一年（1878）	紀尾井坂の変　竹橋事件
明治十三年（1880）	河竹黙阿弥『有馬染相撲浴衣』初演
明治十五年（1882）	福島事件．壬午事変

明治十七年（1884）	群馬事件，加波山事件，秩父事件，甲申政変，大同団結運動
明治十八年（1885）	大阪事件
明治二四年（1891）	大津事件，足尾銅山鉱毒事件，濃尾地震
明治二七年（1894）	甲午農民戦争（東学党の乱）→日英通商航海条約→日清戦争
明治二八年（1895）	下関条約で日本が台湾・澎湖諸島・遼東半島獲得，三国干渉で遼東半島剥奪.
明治二九年（1896）	明治三陸地震
明治三三年（1900）	義和団の乱（義和団事件）．治安警察法
明治三四年（1901）	足尾銅山鉱毒事件
明治三七年（1904）	日露戦争
明治三八年（1905）	日本海海戦．ポーツマス条約．日比谷焼打事件．第二次日韓協約.

だろう.

たとえば，鶴屋南北が『獨道中五十三驛』の趣向を考えた契機について，歌舞伎作者の久保田彦作（1846-1898）によれば，「南北が，怪談にしたのはたまたまある客が次の芝居は怪談らしいとの期待を語っていたから．怪猫の衣装を考えていたら，飼い猫が十二単を着た玉藻前を描いた錦絵をくわえて飛び込んできたので，それに決めた．そこへ，錦絵の持ち主の屑屋が入ってきたが，その姿が行燈に照らされてシルエットになっていたのを見て，行燈に怪猫の影を映すことを思いついた」との楽屋話を『魯文珍報』第9号に書いている．この楽屋話がどのくらい真実なのかも定かではないが，いずれにせよ，創作者の意図を深読みしても確定的なことはいえない.

しかし，そのような劇作が行われた社会背景，化猫ものを熱狂的に受け入れた大衆の（無）意識を考えることはできるだろう.

この時期は，グローバル世界においては社会システムが近代化の方向へ大きく変化した時期であり，西欧諸国は新たな技術によって，世界各地を訪れ，帝国主義を拡大していった時期であった．日本沿岸にもたびたび外国船（黒船）が訪れ，徳川幕府に開国を迫った．国内では，大地震や大型風水害，

54）1793-

火事などが相次ぎ，膨大な数の犠牲者がでていた．さらに，諸外国に門戸を開くことにより，近代文化だけでなく，それ以前の日本ではあまりなかった強力な伝染病が入ってきて，多くの人が罹患し，死者がでた．

武江年表にはこうした災害の模様についてもたびたび記述されている．

○夏より痢病行はる．死亡のもの多し（此の節の病を俗にコロリと云ふ，これを避くる守り也とて，探幽が戯画百鬼夜行の内ぬれ女の図を写し，神社姫と号して流布せしを，尊ぶものもありしなり）（斉藤月岑『武江年表』文政二年）

○同月（七月）末の頃より都下に時疫行われ，芝の海辺，鉄砲洲，佃島，霊岸島の畔に始まり，家毎に此病に罹らざるはなし．八月始めより次第に熾にして，江戸中并近在に蔓り即時に病て即時に終れり……中略……始めの程は一町に五人七人，次第に殖えて簷を並べ一ツ屋に枕を並べ臥たるものあり．路頭に死にけるも有りけり．此の病，暴瀉又暴沙など号し，俗諺に「コロリ」と云へり．西洋には「コレラ」又「アジア」「テイカ」など唱ふるよし（東都の俗ころりといふは，頓死をさしてころりと死したりといふ俗言に出て，文政二年痢病行はれしよりしかいへり．しかるに西洋にコレラといふよしを思へば，おのづから通音なるもをかし）（斉藤月岑『増訂武江年表』安政六年）

こうしたなか，例えば，先にも挙げた国芳の頼光病床四天王の図について，斎藤月岑は筠庭を引きつつ次のような観察を残している．

○浮世絵師国芳が筆の狂画，一立斎広重の山水錦絵行はる．

筠庭云ふ，此の頃国芳，頼光病床四天王の力士直宿を書きたる図に，常にある図なれど，化物に異変なる書き様したり．其の内に入道の首は，已前小産堀と呼ぶ処本所にあり，爰（ここ）に挑灯屋にて凧を売りしが画をかき得ず，猪の熊入道とて，彩色は藍ばかりにて書きたる首即ちこ

れにて，悪画をうつしたるなり．この評判にて人を彼是（かれこれ）あやしみたるもおかし．板元の幸にて売れかた多かりき．近時も療治をする所のつまらぬ錦絵を色々評判うけて売りたり．皆不用意にして幸ありしなり．（斉藤月岑『武江年表』天保年間）

すなわち，たまたま描かれた絵について，人びとがあれこれ詮索し，あたかも何らかの霊験があるかのように思いなして，売れ行きが上がったというのである．

このような現象は，自分たちの手に負えないような社会不安に対して，人びとが当てにはならぬまでも，何らかの対抗手段を講じようとする心理によるものと考えられるだろう．

6.8　集団的流行と「世直し」願望

先の章で述べた流行神の流行は，このようなざわざわした時代環境のなかで起こったのだった．『武江年表』は数々の流行神現象を記録している．たとえば次のようなものである．

○砂村王地稲荷社[55]へ，疝癪[56]を患ふるもの祈願して，霊験を得るよしにて参詣する事始まる（筠庭云ふ，大知稲荷は細川侯下屋敷庭普請ありて，植木屋奉納に稲荷社頭を庭の如く作りぬ．其のころ，人を許して見せしめられしより行はれたり．此の屋敷，今は稲荷の辺川越侯屋敷となりぬ）．（斉藤月岑『武江年表』文化年間（1804 ～ 1818））

○天保七，八年（1836，37年）の頃より，日本橋四日市翁稲荷明神霊験あらたなりとて，祈願をこむる者陰晴を嫌はず群集し，又文政の頃（1818

55）砂村せんき稲荷は，昭和42年（1967）千葉県習志野市へ移転し，現在は跡地（江東区南砂3-4）に疝気稲荷神社の小祠が残っている．
56）胸や腹がさし込んで痛む病気．（大辞林）

～ 30）より四谷新宿の北正受院に安んずる所の奪衣婆へ，口中の病を祈りて参詣の者多かりしが，嘉永の今に至り弥（いよいよ）盛になり，諸願を祈り日参百度参の輩多し（斉藤月岑『武江年表』天保年間（1830-44年））

江戸市中の稲荷への参詣よりも大がかりなものに「おかげ参り」がある.

○春の頃より始まりけん，伊勢大神宮おかげ参り流行し，次第に諸国におよぼし，江戸よりも参詣する者夥し（阿州の者参り始めしより四国一円になり，又京大坂に移り夫より諸国に及ぼせしとぞ．宝永の件にいへる如く，道中施行の宿施行渡し有り，馬駕は美麗に飾りて，参詣の輩をのせ価を受けず，酒飯菓子等を餐し，金銭手拭其の余道中要用の品を与ふ．貧賤の者といへども，参宮の者へは礼を厚くしてこれをもてなす．宿々の繁昌言語の及ぶ所にあらずとなむ. 十月の頃にして此のこと止む.）（斉藤月岑『武江年表』天保元年（1830年））

さらに，慶応三年～四年にかけては一般に「ええじゃないか」と呼ばれる集団的乱舞が日本全国で起こった.

○冬の頃，夜中窃かに屋上又は垣塀の内，家前等へ，神仏の守を散らし置くものあり．翌日其の家のあるじ奴婢等これを拾ひ得て，不思議の事とて尊信するものもあり．人心を惑はす所為なれば, 官府より御沙汰あり．やがて此の事止みたり【斉藤月岑『武江年表』慶応三年（1867年）】

○春の頃より，東海道駿河遠江の辺より始まり，虚空より太神宮の御祓太麻ふり，又宇内の神仏の御影，守護の札ふりしとて，村民等これを尊み祭り，酒飯を調へて親戚知己又は道往く人をさへ饗し，次第に長じて，男女老幼にいたるまで一様の新衣を着し，花万度を持出し伎踊を催して賑ひける．此の風俗，江府の市中に及ぼし，古き守札など窃かにに降らして惑はせし族もありけるが，程なく止象たり．信州の辺にも流伝して

此の事あり，彼の地にも殊に美服をととのへ，伎踊練物を催して賑ひけるが，是れも程なくして止みたりとなむ．（斉藤月岑『武江年表』明治元年（1868年））

図24 「ええじゃないか」『絵暦貼込帖』より（国立国会図書館蔵）

こうしたナンセンスな流行，激しい集団的狂騒は，多くの場合，大衆が刹那的な享楽を求めて暴走した現象と見なされる．しかしそれだけだろうか．「ええじゃないか」については，遠藤（2009, 2010）も参照していただきたいが，その背後には，時代の閉塞感に対して，始原神話に基づく「マツリ」を挙行することで「世直し」を図ろうとする無意識があると考えられる．

宮田は，次のように述べている．

「ええじゃないか」にしても，その性格の基礎に，日常性の否定が横

たわっていることが従来指摘されてきた．神符の降下があって踊りがはじまり，祝宴が連続し，仮装する．男が女になり，女が男になるという日常の価値転換があり，そこにオルギッシュな状況を現出させている．「天降始り江戸中うかれ出し候ハぐ賊乱も自然と相納，世直し踊に而も相始り候ハぐ面白からん」（『丁卯雑拾録』）とあって，これは「世直し」の踊りであるとの観念である．お蔭踊りにあるような豊耕祭儀の「世直り」とは異なることは明らかだが，さりとて世直し一揆に現われるような日常性の全面否定ではない．･･･（中略）・・・「ええじゃないか」のオルギッシュな法悦境には，たとえば男女の価値転換があってる，それが異質の世界の交替という形で表出してはいない．「ええじゃないか」の場合何よりも現実世界の中での解放気分をショー化したという受取り方が可能であり，そうした本質的な部分において「世直し」観に相異があるといえるだろう．（宮田2：98）

宮田も言及しているように，この時期，戊辰戦争だけではなく，多くの「世直し一揆」が日本中で頻発していた．しばしば，「明治維新は無血革命だった」というような言い方がなされるが，実際には，江戸から明治への移行には様々な対立，紛争があり，血が流されたのだった（遠藤2018など参照）．

「世直し一揆」の行われた地域には，養蚕，製糸業の盛んな地域も多かった，そうした地域では，養蚕に関わる課税に対する不満が一揆の原因ともなっていた．その意味では，江戸期に養蚕などの産業振興によって力を付けた地方中間層による政治行為が「世直し一揆」として現れたともいえる．

それでも，相対的には安定的に，近世から近代への転換がなされた底には，（それをどのように評価すべきかは別として）民衆が状況に対する違和感を，直接的な「力」よりもむしろ文化的なオルギーとして表現することによって，時代変化を乗り越えたと理解することもできるかもしれない．

6.9 化け猫＝招き猫と「世直し」願望

「流行」とは，「時代性」と「神話構造」の交差する点で発生する．他愛もない庶民の憂さ晴らし，頼りがいのない神頼みの表れと見える招き猫／化け猫風説の流行も，それが社会現象として可視化されるとき，それは人間社会の根源的な願望と深いところで接続していると考えられる．

江戸政体がグローバルな状況変化の中で限界を露わにし，大きな自然災害が次々と人びとを襲うとき，人びとは言葉にならない想いを（必ずしも信じているわけではない）表徴に仮託する．たとえば，甚大な被害を出した安政の大地震に際しても，人びとは悲嘆に暮れるばかりではなく，地震の親玉としての鯰を笑う「鯰絵」をもてはやした．それは,「地震」という巨大な「自然」の力をコントロールしたいという願望を暗に表したものだったかもしれない．

招き猫／化け猫風説とその娯楽的表現（人形，芝居など）もまた，時代に翻弄される人びとの無意識を暗黙に表現するもであったと考えることができる．ではそれはどのような無意識であったろうか．図25は，招き猫／化け猫風説の構造を図示したものである．ここからわかることは，招き猫が「報恩（恩返し）」を表し,化け猫が「報復（祟り）」を表すとしても,それらは「猫」が二つの性格を持っているというよりは，猫が異なる対象に対してそれぞれに応じた対応をしているというにすぎない．すなわち，社会のなかに，支配者と被支配者がいるとして，猫は被支配者よりさらに弱い立場にあるが，被支配者と愛情で結ばれたとき（恩を受けたとき），被支配者に力を与える契機となる．あるいは，被支配者が支配者によって苦しめられたときには，被支配者に替わって支配者に報復する．これも結局は，被支配者に対する「報恩」であると捉えることも可能である．つまり,「猫」はいずれの場合も,「弱い被支配者」のために力を貸しているのである．この構造ゆえに，招き猫も化け猫もともに庶民のヒーローとなり得たのである．

図25の図式は，図26のように描き直すこともできる．

すなわち，現世社会では，強い立場の者たちがその力によって，互いに

助け合いながら暮らしている弱い立場の者たちに悪業をはたらき，強いものはますます強く，弱いものはますます弱くなっていく．これに対して現世社会の外部に存在する〈猫〉は，それ故に社会を超越した存在である〈神〉（自然（法），規範）として，悪行に対しては制裁を，善行に対しては褒賞を与え，強者と弱者の間の不公正を正すという寓意である．

それは，人間社会における最も基本的な規範（自然法）であり，最も普遍的な〈正義〉実現の申し立てであったと解釈することができるのである．

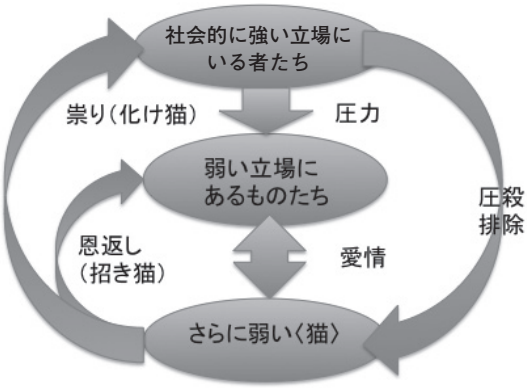


図25　招き猫／化け猫風説の構造

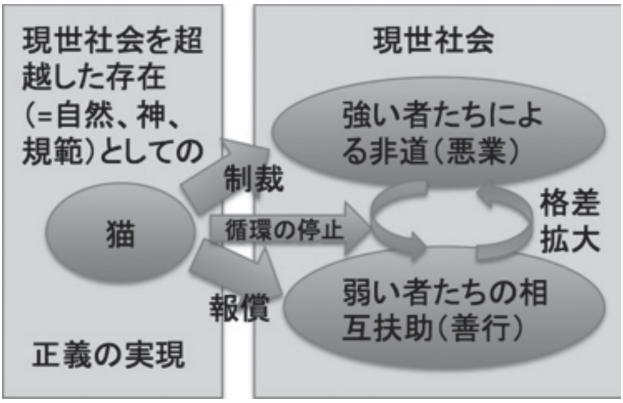


図26　〈猫〉の果たす〈正義〉

7．終わりに

以上の考察が示すのは，江戸期「招き猫」現象は，当時の社会環境と始原的世界観，局所固有性（土着性）と普遍性（世界共通性）が，複合的に衝突する地点で発生したものであるということである．そして現代，異なる時代状況において，同様の複層的衝突のなかで「招き猫」ブームが生成されていると考えられる．この視点は，あらためてわれわれの社会における「流行」とその未来に関する理論的基礎を提供する．

それとともに，〈猫〉の表徴による暗示的・文化的な社会的正義の主張は，同時代の西欧諸国で近代への移行期に起こった「市民革命」とどのように違い，それが現代にまでいかなる潜在的な軋轢を生んでいるかということについても，われわれは繰り返し考える必要がある．「暗示的主張」の系譜は，今日も批判される日本における「民主主義の未成熟」と接続しているかもしれない．しかし同時に，かつてあったかもしれない「文化的主張」という社会戦略は，何らかのオルタナティブな社会構想を潜在させていたかもしれない．

渡辺京二は，『逝きし世の面影』で次のように述べている．

> 只野真葛（一七六三～一八一五）は『赤蝦夷風説考』の著者として知られる工藤平助（一七三四～一八〇〇）の長女であるが，彼女の書きのこした『むかしばなし』には化物・妖怪のたぐいがしきりに登場する．むろん彼女はその実在を信じていたのである．人を化かすのは狐狸ばかりではない．猫もまた化かすのである．仙台藩が袖ヶ崎に江戸藩邸を構えたとき，長屋に石が打ちこまれたり，蚊帳の釣手が落ちたり，妖異が絶えなかったが，長屋の廟に昼寝している大猫の姿が小面憎いというので，ある人が鉄砲で仕止めたところ，その後異変ははたとやんだと彼女は書いている．だが彼女によれば，化猫にはずいぶんと愛らしいのもい

た．土井山城守の居城刈屋城には，いつしか小犬ほどの猫が棲みついていた．ある春のこと,「花の盛りいつよりも出来よく,日もすぐれて長閑」だったので，御番の侍たちは申し合わせて，外庭の芝生で花を見ながら弁当をつかっていた．そこへどこから現われたか,「えもいわれず愛らしき小猫の毛色見事にぶちたるが，紅の首たが掛けて走りめぐり，胡蝶に戯れ遊び狂うさま，あまり美くしかりし故，いずれも見とれて居たりしが」，そのうち「首輪をかけたのは飼猫の証拠．こんな小猫がどうやって城中まで迷い来たのか，怪しい怪しい」と言いながらある者が焼お握りをひとつ投げてやると，小猫はたちまち大猫の正体を現わしてそれに喰いついた．正体を見せたのを羞じたのか，お城に棲むその大猫はその後二度と人前に姿を見せなかったという．・・・(中略)・・・只野真葛は先にあげたような怪異譚をことごとく信じていたが，彼女自身はけっして蒙昧な庶民の女というのではなく，その卓越した知力を滝沢馬琴からも認められた学人だったのである．

猫がものを言う話は根岸の『耳袋』にものっている．・・・(中略)・・・筆者根岸鎮衛は勘定奉行，町奉行を歴任した名うての能吏だった．真葛や鎮衛は十八世紀から十九世紀にかけて生きた人だが，幕末まではいうに及ばず，明治の前期においてすら猫の怪異力を信じる人は大勢いた．というよりこの国の近世文明は，猫や狐の怪異を承認するような心性を基盤として環境世界と交渉する文明だったのである．でなければ漱石は『猫』という作品を発想できなかっただろう．『猫』はけっしてティークやホフマンの流れを受けて生れた作品ではなく，猫に自分の愚痴を聞いてもらうような江戸期の想像力のうちにはらまれた作品なのだ．(p.513-5)

地球環境の悪化が懸念され，持続可能な社会のあり方が模索される現在，招き猫=化け猫を受け入れるような「心性を基盤として環境世界と交渉する文明」から，私たちは何らかの示唆を受けることもできるのではないだろうか．

【参考文献】

遠藤薫，1996,「「おまじない」の神様」『企業診断』1996年5月号,104-5

遠藤薫，2009,『聖なる消費とグローバリゼーション』勁草書房

遠藤薫，2010,『日本近世における聖なる熱狂と社会変動』勁草書房

遠藤薫，2015,「招き猫とは何か―近世都市伝説と始原神，およびその現代的意義」（文化資源学会研究発表大会2015報告，2015.7.11）

遠藤薫，2016,「なぜいま，カワイイ」が人びとを引きつけるのか？」『<知の統合〉シリーズカワイイ文化とテクノロジーの隠れた関係』，東京電機大学出版局

遠藤薫，2016,「カワイイ文化とテクノロジーの隠れた関係―江戸期の猫ブームを例として」感性工学会「かわいい人工物」研究部会・〈知の統合〉シリーズ発刊記念公開シンポジウム（2016.5.21芝浦工業大学）

遠藤薫，2017,「近世における都市－農村・日本-世界の文化的交差－〈近代〉を準備した江戸の猫ブーム」『学習院大学法学会雑誌』53巻1号（2017年9月号），41-82.

遠藤薫，2018a,「猫の島から東日本大震災を考える―越境する・社会，をとらえる，越境する・知」『学術の動向』2018年4月号

遠藤薫（編），2018b,『日本の近世から近代への移行期における〈国家意識〉とアジア』勁草書房

藤井享子，2010,「江戸前期小袖の猫文様について」河添房江編『王朝文学と服飾・容飾』平安文学と隣接諸学９，竹林舎

藤井乙男，1921,『江戸文学研究』内外出版

藤沢衛彦，1928,「怪猫劇の祖源」『歌舞伎研究』歌舞伎出版部，1928年3月号，p.27-45.

藤原重雄，2014,『史料としての猫絵』山川出版社

河添房江，2008,『光源氏が愛した王朝ブランド品』角川学芸出版

喜多村筠庭，1830=1932,『嬉遊笑覧　下』成光館出版部

小林光一郎，2008,「「踊り歌う猫の話」に歌が組み込まれた背景－「猫じゃ

猫じゃ」の歌を事例に」『非文字資料研究の可能性－若手研究者成果論文集－』pp. 233-249，神奈川：神奈川大学21 世紀COEプログラム
正木ゆみ，1993,「宇治座の浄瑠璃と江戸歌舞伎との交流－初代中村七三郎との関連を中心に」『近代文藝』58巻 p.15-34
三浦正雄，2011,「黙阿弥の怪談と怪異，明治維新以後の変遷：日本近現代怪談文学史5」『埼玉学園大学紀要. 人間学部篇』第11巻, 310（59）-293（76）
三浦正雄，2014,「黙阿弥の怪談と怪異，明治維新以後の変遷（続）：日本近現代怪談文学史9」『埼玉学園大学紀要. 人間学部篇』第14巻，227-242
宮田登，2006,『はやり神と民衆宗教』吉川弘文館
宮田登・塚本学・編，1994,『民間信仰と民衆宗教』吉川弘文館
宮武外骨（編），1921=1997,『売春婦異名集』大空社
中野栄三（編著），1963,『性風俗事典』雄山閣
根岸光男，2006,『生類憐みの世界』同成社
斉藤良輔編，1997,『郷土玩具辞典』東京堂出版
斉藤良輔編，1997,『日本人形玩具辞典（新装普及版）』東京堂出版
佐藤潔，1935,『玩具と縁起』人文書院
曽田めぐみ，2013,「歌川国芳筆「源頼光公舘土蜘作妖怪図」再考― 妖怪の図像源泉と五雲亭貞秀作品との関わりをめぐって ―」美術史学会例会報告　要　旨（http://www.bijutsushi.jp/pdf-files/reikai-youshi/2013_09_21_nishi_02_soda.pdf）
高久久，1995,『歌舞伎動物記－十二支尽歌舞伎色種』近代文藝社
高橋順二・編，1994,『日本絵双六集成』柏美術出版
棚橋正博，2014,「解題」『山東京傳全集　第十巻』ぺりかん社
渡辺京二，2005,『逝きし世の面影』平凡社
柳田國男，1941,「おもちゃの起り」『こども風土記』（朝日新聞連載）
矢田挿雲，1921,『江戸から東京へ. 第2編』金桜堂書店
横浜市 編，1931-3,『横浜市史稿. 産業編』
横山泰子，2000,「芝居と俗信・怪猫物の世界－『獨道中五十三驛』試論」

小松和彦・編『妖怪』河出書房新社